

高 等 学 校

学 習 評 価 事 例 集

高等学校における確かな学力の向上のために

平成15年3月

山 口 県 教 育 委 員 会

はじめに

平成15年4月から実施される新高等学校学習指導要領は、完全学校週5日制の下で、各学校がゆとりの中で特色ある教育を展開し、豊かな人間性や基礎・基本を身に付けさせ、個性を生かし、自ら学び自ら考える力などの生きる力を培うことを基本的なねらいとして改訂されたものです。

このようなねらいを実現するために、平成12年12月に教育課程審議会から「児童生徒の学習と教育課程の実施状況の評価の在り方について」の答申が出されました。この答申では、これからの評価について、観点別学習状況の評価を基本とする現行の評価方法を発展させ、目標に準拠した評価を一層重視するとの基本的な考え方に立ち、生徒一人一人のよい点や可能性、進歩の状況などを積極的に評価することが重要であると述べています。

高等学校の評価は、従来から、目標に準拠した評価とされているところですが、知識や技能など一部の観点に偏した評価が行われることのないよう、「関心・意欲・態度」「思考・判断」「技能・表現」「知識・理解」の四つの観点を十分踏まえて評価することが大切です。

県教育委員会としては、新学習指導要領の目指す方向が、これからの高校生に真に必要な力を育てることにつながるよう、「高等学校における確かな学力の向上」を検討課題とする平成14年度学校問題検討協議会を設置し、具体的テーマのひとつとして「これからの評価の在り方」について研究してきました。このたび、その研究成果が報告されましたので、県内の各学校の取組みの参考となるよう「評価事例集」としてまとめ、県内の高等学校に提供することといたしました。

各学校においては、本冊子を活用し、「確かな学力」をはぐくむと同時に、これまで以上に生徒一人一人の学習状況を適切に評価し、指導の改善に生かされることを期待します。なお、研究に当たった協議会委員の関係から、全教科にわたる研究とはなっておりませんことを御了承ください。

最後に、本冊子を作成するに当たり、御協力いただきました平成14年度学校問題検討協議会の会長を初めとする委員の先生方に心からお礼を申し上げます。

平成15年3月

山口県教育庁指導課長 棟久郁夫

目 次

第1章 総説	-----	1
1 評価の基本的な考え方		
2 評価の実際		
3 評価の活用		
第2章 評価規準・評価方法等の例	-----	6
1 教科・科目の評価		
(1) 国語	-----	6
(2) 地理歴史	-----	15
(3) 公民	-----	24
(4) 数学	-----	33
(5) 理科	-----	41
(6) 外国語	-----	50
(7) 工業	-----	59
(8) 商業	-----	66
2 「総合的な学習の時間」の評価	-----	74

第1章 総説

1 評価の基本的な考え方

(1) 今求められる学力とは

新しい学習指導要領は、基礎・基本を確実に身に付け、それを基に、自分で課題を見付け、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、行動し、よりよく問題を解決する能力や、豊かな人間性、健康と体力などの「生きる力」を育成することを基本的なねらいとしている。その実現のために、今「確かな学力」を身に付けることが求められている。学力については、知識や技能を重視する立場、筋道を立てて考える力を重視する立場、自分で積極的に学び探究しようとする意欲を重視する立場などから、様々にとらえられているところであるが、「確かな学力」については、次のようにとらえることとしている。

知識・技能のみならず、学ぶ意欲や、自分で考え、自分で判断する力、自分で表現する力などを含めた総合的な力が「確かな学力」である。

(2) 評価の機能

学校の教育活動は、生徒のよりよい成長を目指し、意図的、計画的、組織的に行われており、計画、実践、評価、改善という一連の活動が繰り返されている。その活動を効果的に行うために、評価を充実させる必要がある。

学習の評価は、生徒の学習や発達を促すための評価であると同時に、学校や教員が進める教育活動そのものの評価でもあり、その機能は次の2つに大別される。

- ① 生徒一人一人のよさや可能性を評価し、多様な学力に気付かせ、豊かな自己実現に役立つようにする。
- ② 各学年、各教科等の教育目標を実現するために、学校や教員が、指導計画や指方法、教材、学習活動等を振り返り、よりよい指導に役立つようにする。

(3) 評価の観点

高等学校の各教科・科目の評定については、従来から、目標に準拠した5段階評価とされており、基本的には現行の評価方法を維持することとなる。

その際、新学習指導要領では、これまで以上に「関心・意欲・態度」「思考・判断」「技能・表現」「知識・理解」の四つの観点による評価を十分踏まえながら評定を行うことが求められている。このため、ペーパーテスト等による知識や技能のみの評価など、一部の観点到偏った評定が行われることのないよう十分配慮する必要がある。

(4) 評価の位置付けと方法

評価は、目的や形態に応じて様々な方法があるが、基本的には生徒一人一人に即して評価することが大切であり、生徒一人一人が各教科等の目標に到達しているかどうかをみる必要がある。これが目標に準拠した評価（いわゆる絶対評価）である。

新学習指導要領では、観点別学習状況の評価を一層重視しており、それを基本として目標に準拠した評価を適切に行うことが求められていることから、学習の目標を明

確にして、学習指導計画を立てるとともに、観点ごとの評価規準を作成し、評価計画を立てることが必要である。

具体的には、年間を通じて、「いつ」、「どこで」、「どのような項目を」、「どのようにして」評価するのか、評価の時期、場所、方法などを工夫し、生徒の学習の状況を総合的に評価することが大切であり、次の事項に留意し、各学校の実態、生徒の実情に応じて評価方法を工夫改善することが大切である。

<留意事項>

- ・ 総合的な評価のみでなく、分析的な評価、記述的な評価も工夫すること。
- ・ 評価の場面は学習後だけでなく、学習の過程における評価も大切であり、それを適切に組み入れるよう工夫すること。
- ・ 評価の時期は、学期末や学年末だけでなく、目的に応じ、単元ごと、単位時間ごとなど適切に設定するよう工夫すること。
- ・ 評価の方法は、ペーパーテストのほか、観察、面接、質問紙、作品、ノート、レポート等を用い、その選択・組合せを工夫すること。

(5) 評価の客観性・信頼性を高めるために

評価の信頼性を高めるには、評価規準、評価方法等については、実践の経験やその成果を踏まえながら、絶えず見直しを行っていくことが大切である。

また、同一教科担当者間のもとより、広く学校全体で評価に関する情報を共有し、共通理解の徹底を図ることにより、評価を行う教員の判断や裁量を共通的なものとしていくことが大切である。さらに、評価に関する情報を生徒や保護者に対して適切に提供し、十分に説明していくことなどにより、評価の客観性や信頼性をより高めていくことが求められる。

2 評価の実際

(1) 評価規準作成のプロセス

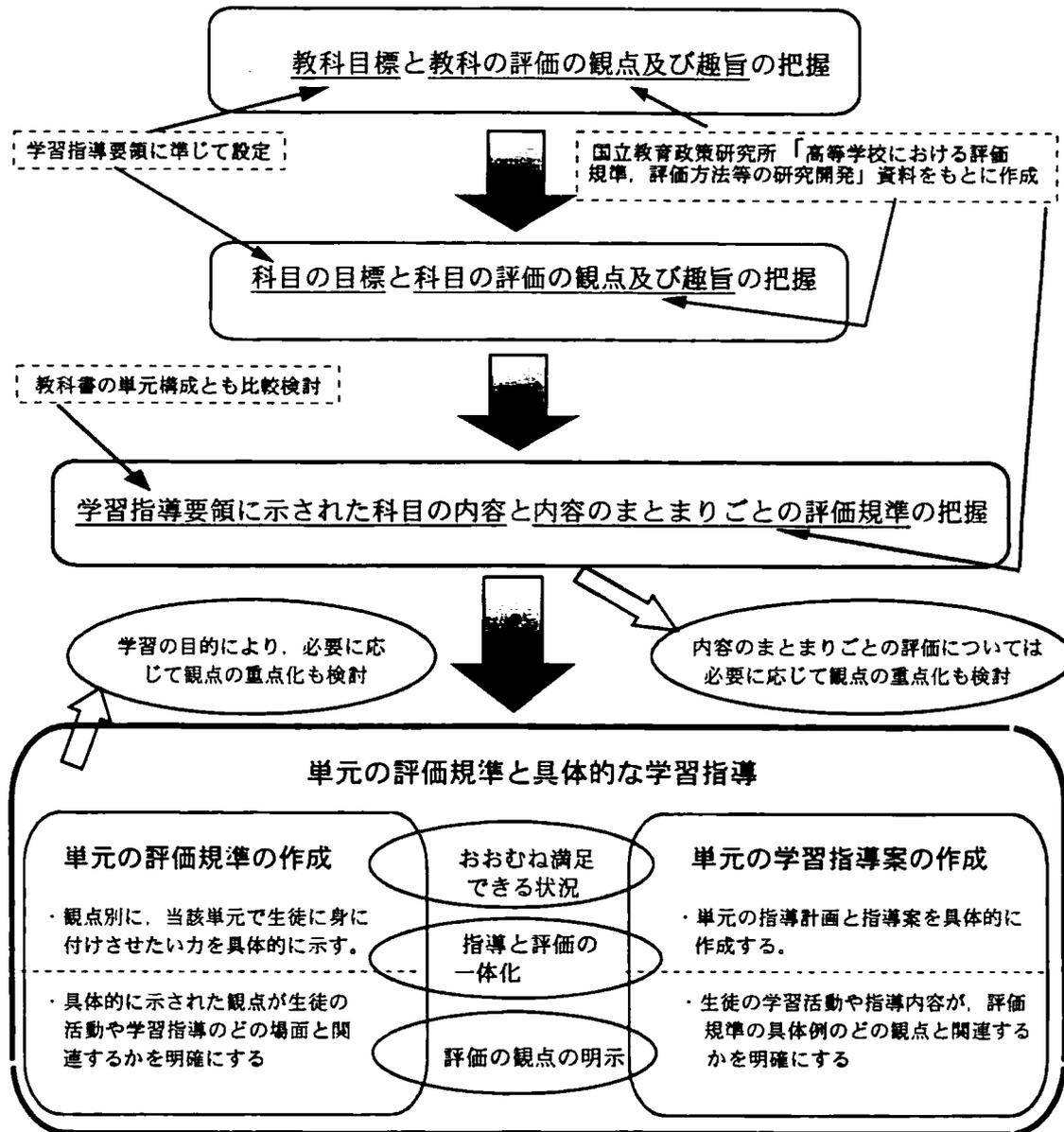
高等学校における評価規準、評価方法等については、教育課程審議会答申(平成12年12月4日)を受け、国立教育政策研究所が「高等学校における評価規準、評価方法等の研究開発」を行っており、平成14年度末には、評価規準案がまとめられる。これは、新学習指導要領及び平成13年4月27日付け文部科学省初等中等教育局長名の指導要領改善についての通知において示された当該教科の評価の観点及びその趣旨を踏まえ、「内容のまとまりごとの評価規準及びその具体例」を示した調査研究資料である。平成15年度末には、実践事例も含めた報告書となる予定である。

なお、中学校における評価規準、評価方法等については、すでに「評価規準の作成、評価方法の工夫改善のための参考資料」として研究成果が示されている。

また、山口県教育委員会においても、平成14年度からの中学校における絶対評価への転換を受けて、その評価の客観性・信頼性を高めるために、平成14年10月に「学習評価に関する留意事項」を示している。

このような状況の中で、各高等学校においても、学習指導を進める際に観点別学習状況の評価をどう取り込んでいくのかということに視点を置いて単元レベルにおける評価規準を作成し、学習評価を行い、それらを集約して学年末の評定を行うための工夫改善が求められている。単元の評価規準作成までのプロセスは次のようになる。

単元の評価規準作成までのプロセス



(2) 観点別学習状況の評価

観点別学習状況の評価規準の作成に当たっては、小中学校の指導要録における観点別学習状況の記入方法に準じて、3段階で設定することとした。

学習指導要領の各科目の目標に照らして、その実現状況を観点ごとに評価し、A、B、Cの記号で表示する。その表示方法は次のとおりである。

A：十分満足できる B：おおむね満足できる C：努力を要する

単元（題材）等における評価規準は、「おおむね満足できる」状況（B）を設定し、その規準に照らして、まず、「おおむね満足できる」状況（B）か「努力を要する」状況（C）かを判断した上で、さらに「おおむね満足できる」状況（B）と判断されるもののうち、生徒の学習の実現の程度について質的な高まりや深まりをもっている

と判断されるものを「十分満足できる」状況（A）とする。

- ・ 各観点ごとに、評価規準によりA, B, Cを記録する。
- ・ 評価がCとなった生徒への支援等の具体例を策定しておく。

(3) 観点別学習状況の評価の総括

それぞれの学習活動における観点別評価を単元で総括した例

- ・ 「A, B, A」を「A」と総括
- ・ 「B, B, A」を「B」と総括
- ・ 観点を重点化している場合は、その観点の評価に傾斜をかけて総括する。
- ・ 総括の方法には、A, B, Cの個数による方法、A, B, Cを点数化する方法などがある。

単元名 ○○				
評価の観点	関心・ 意欲・ 態度	思考・ 判断	技能・ 表現	知識・ 理解
学習活動1	A	B		A
学習活動2		B	B	A
学習活動3	B		B	
学習活動4	A		A	A
総括	A	B	B	A

(4) 学期末や学年末における評定への総括

学習活動における観点別評価を単元で総括した評価を元に、学年末の評定を出すまでの基本的な手順を示すと右のようになる。

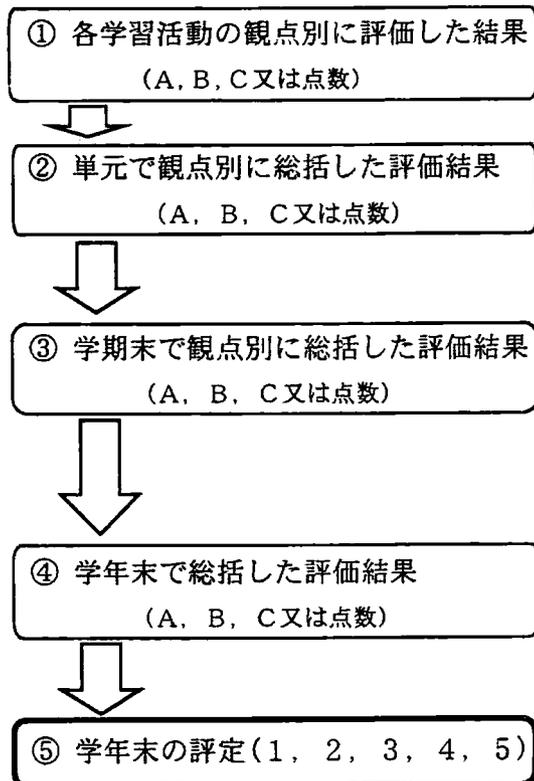
各評価のウエイトの置き方や評定までの手順などについては、生徒、保護者へきちんと説明できる妥当性、明快性が必要である。

右図②は、(3)で示した観点別評価を単元で総括したものであり、それと単元ごとに実施した小テスト及び定期考査（中間、期末、学年末考査等）から学年末の評価を出し、それを元に当該学年における評定を出すことになる。

なお、単元ごとの小テスト等については、知識・理解のみに偏らず、各観点の達成度を測れる評価問題となるよう留意することが大切である。

また、ペーパーテストによる評価のウエイトについては、学校や生徒の実情に合わせて、妥当な割合を設定するなどの工夫も必要となる。

その他、各教科・科目の特性により、評価方法の工夫が必要であるが、あまりにも細部に渡る評価規準を設定したり、常に多様な評価方法を組み合わせたりすることは、評価する者にとって過大な負担を強いることになる。大切なことは、評価が評価のた



めの評価になるのではなく、生徒の学習の発達や指導の改善に資するものであるということをも十分踏まえ、公平かつ効率的な評価方法を工夫することである。

3 評価の活用

(1) 今後の指導に生かす評価

評価は、生徒にとって自分の学習に対する成果を見つめ直し、今後の学習をより一層充実させるための指標となるものであり、後の学習の支援に生かしてこそ意味があるものとなる。つまり、指導と評価は別物ではなく、評価の結果によって後の指導を改善し、さらに新しい指導の成果を再度評価するという、指導に生かす評価を充実させることが重要である。このことを具体的に示すと、次のような指導と評価のサイクルとなる。



(2) 目標に到達しなかった生徒への手だて

設定した学習目標に到達せず「努力を要する」と評価された生徒については、まず、教師が生徒の学習内容の習熟の程度を的確に把握するとともに、学習の遅れがちな原因がどこにあるのかを把握することが必要である。また、生徒に学習の成果や課題に気付かせるための自己評価を行わせ、到達し得なかった分野・領域を補充する措置を講じるなど、個に応じた適切な支援の手だてを考えていくことになる。

具体的には、設定した到達目標（評価規準）の妥当性の吟味、一斉授業やグループ活動における学習過程の検証などを行い、生徒自身が自ら学ぶ意欲を向上させるための支援となるよう、授業中さらには放課後や長期休業中等の時間を活用しての個別指導等を行うことにより、評価が真にその機能を果たし指導に生かされるものとなることが大切である。

第2章 評価規準・評価方法等の例

1 教科・科目の評価

(1) 国語

国語

ア 教科目標「国語」

国語を適切に表現し的確に理解する能力を育成し、伝え合う力を高めるとともに、思考力を伸ばし心情を豊かにし、言語感覚を磨き、言語文化に対する関心を深め、国語を尊重してその向上を図る態度を育てる。

イ 教科の評価の観点及び趣旨

関心・意欲・態度	話す・聞く能力	書く能力	読む能力	知識・理解
国語や言語文化に対する関心を深め、国語を尊重してその向上を図り、進んで表現したり理解したりするとともに、伝え合おうとする。	自分の考えをまとめたり深めたりして、目的や場面に応じ、筋道を立てて話したり的確に聞き取ったりする。	自分の考えをまとめたり深めたりして、相手や目的に応じ、筋道を立てて適切に文章を書く。	自分の考えを深めたり発展させたりしながら、目的に応じて様々な文章を的確に読み取ったり、読書に親んだりする。	表現と理解に役立つための音声、文法、語句、語彙、漢字等を理解し、知識を身に付けている。

ウ 評価方法の例

(ア) 科目の目標「国語総合」

教科の目標に同じ

(イ) 科目の評価の観点の趣旨

教科の評価の観点及び趣旨に同じ

(ウ) 科目における内容のまとめ、時間配分及び単元の設定の仕方

- ① 「国語総合」においては、学習指導要領の内容の「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」を内容のまとめとし、[言語事項]は各内容のまとめの中に、関連する事項として含める。
- ② 「国語総合」を4単位(140時間)で実施する場合、「話すこと・聞くこと」に15時間、「書くこと」に30時間、「読むこと」に95時間を配当する。また、「読むこと」は、現代文と古典をほぼ同じ割合で配当する。
- ③ 「国語総合」を、教科書を利用して単元設定した場合、主として「話すこと・聞くこと」の単元、主として「書くこと」の単元、主として「読むこと」の単元に分けられる。従って、国語科の5つの観点のうち、「関心・意欲・態度」「知識・理解」は、すべての単元において評価できるが、残りの3観点については、「話すこと・聞くこと」の単元では「話す・聞く能力」、「書くこと」の単元では「書く能力」、「読むこと」の単元では「読む能力」を主に評価する。

月	単元名 (時数)	単元目標	評価の観点					評価規準	評価方法
			関心 意欲 態度	話す 聞く 能力	書く 能力	読む 能力	知識 理解		
4	国語入門 (2)	・国語の学習目標確認。 ・自己を表現する。	○		○			・級友に自分らしさを伝えられている。	作文評価
	随想 (8)	・個人的な体験や自由な発想から生まれたものの見方、感じ方を読み取る。 ・「わたしの体験」をスピーチする。	○	○		○	○	・叙述に即して理解している。 ・文章を読んで、自己のものの見方、考え方を広げている。 ・自分の体験や考えをわかりやすく伝えている。	行動観察 言葉の小テスト チェックシート
	古文入門1 説話 (8)	・古語と現代語の違いを理解する。 ・歴史的仮名遣い、用言の活用を理解する。 ・古人の知恵や生き方に触れ、古文を読む楽しさを知る。	○			○	○	・古語と現代語の違いを理解している。 ・歴史的仮名遣い、動詞の活用を理解している。 ・叙述に即して説話の内容を読み取っている。	行動観察 小テスト チェックシート
5	定期考査		○		○	○	○		
	小説 「羅生門」 (7)	・下人の心理を読み取り、状況で揺れ動く人間の生き方について考える。 ・効果的な表現に気づき、表現の意図を読み取る。 ・古典を題材とした小説の紹介文を書く。	○		○	○	○	・興味を持って読んでいる。 ・構成を理解し、人物の心情を深く読み味わっている。 ・効果的な表現に気づき、表現の意図を読み取っている。 ・読み手を意識して書こうとしている。	行動観察 チェックシート 言葉の小テスト 作文評価
6	漢文入門 格言故事 (8)	・漢文を読む意味を理解する。 ・訓読の基本を知る。 ・格言、故事を理解する。	○			○	○	・言語文化に対する関心を深めている。 ・訓点や書き下し文、置き字、再読文字について理解している。 ・表現に即して正確に読み取っている。	行動観察 小テスト チェックシート
	評論 (8)	・評論文の論の進め方と、具体例の用い方に注意して、論旨を把握する。 ・筆者の独自の視点に注目し、思考の深め方を学ぶ。	○			○	○	・叙述に即して的確に読み取っている。 ・文章の構成を確かめ、筆者の論の進め方を把握している。 ・文章を読んで、自己のものの見方考え方を深めている。	チェックシート 言葉の小テスト チェックシート 行動観察
7	定期考査		○		○	○	○		
	小論文1 テーマ 「視点を 変えてもの 見る」 (3)	・論理的な文章の書き方を学ぶ。 ・目的に応じて材料を探し、題材を効果的に用いている。	○	○	○	○	○	・評論の構成を参考にして、論理的な文章の論の進め方を理解している。 ・題材を探すために、協力して話し合う。 ・目的に応じて題材を選んでいる。	チェックシート 行動観察 チェックシート 論文構成図と小論文を評価
9	古文入門2 随筆 (8)	・助動詞の活用を理解する。 ・古文に触れ、内容を理解する力をつける。 ・中世の人々のものの見方や生き方について考える。 ・「わたしの好きな「徒然草」」を表現する。	○		○	○	○	・助動詞の活用を理解している。 ・叙述に即して内容を理解している。 ・随筆を読んで、ものの見方を広げている。 ・目的や読み手に応じて、わかりやすく表現している。	小テスト チェックシート レポート評価
	詩 (6)	・詩に親しみ、詩情を味わう。 ・詩独特の言葉の使い方や表現法を理解する。 ・好きな詩を朗読する。	○	○		○	○	・表現に即して詩の世界を理解している。 ・詩の表現技法を理解している。 ・朗読という目的に応じて、話し方に気をつけている。	行動観察 チェックシート (相互評価)
	小説 「夢十夜」 (6)	・短編小説のおもしろさを味わう。 ・表現に即して内容を理解する。 ・「こんな夢を見た」という創作文を書く。	○		○	○	○	・表現の美しさに気づき、小説を味わっている。 ・独特な言い回しや表現方法を把握し、内容を理解している。 ・優れた文章を参考にしつつ、目的に応じた文章が書けている。	感想文確認 チェックシート 制作文評価
10	漢詩 (6)	・唐詩をとおして、漢詩の形式や語法を知る。 ・唐詩に表れたものの見方感じ方を理解する。	○			○	○	・漢詩の決まりを理解している。 ・漢語の意味を理解している。 ・唐代のものの見方感じ方がどこに表れているか理解している。	小テスト 行動観察
	定期考査		○		○	○	○		

	短歌・俳句 (8)	<ul style="list-style-type: none"> 短歌や俳句に表現された世界を理解し、作者の感動を味わう。 短歌、俳句の表現上の特徴を理解する。 5文鑑賞文を書く。 	○		○	○	○	○	<ul style="list-style-type: none"> 表現に即して、作者の感動を読み取っている。 短歌の修辞法や季語、切れ字などを理解している。 5文の構成の仕方を理解して書いている。 	<ul style="list-style-type: none"> 行動観察 チェックシート 鑑賞文評価
	古文入門3 軍記物語 (8)	<ul style="list-style-type: none"> 助動詞の活用、音便、敬語を理解する。 登場人物の心情の移り変わりを読み味わう。 グループで役割を決めて群読する。 	○	○		○	○	○	<ul style="list-style-type: none"> 助動詞や敬語を理解している。 心情を表現した言葉を正確に理解し心情を読み取っている。 聞き手に伝わるような役割、読み方を工夫している。 	<ul style="list-style-type: none"> 小テスト チェックシート (相互評価)
11	漢文 史話 (6)	<ul style="list-style-type: none"> 漢文に慣れ、内容を理解する力を身に付ける。 中国古代の人々のものの見方を理解する。 疑問反語形について理解する。 	○			○	○	○	<ul style="list-style-type: none"> 叙述に即して的確に読み取っている。 言語文化についての理解を深め、自己のものの見方を広げている。 句法を理解している。 	<ul style="list-style-type: none"> チェックシート 行動観察 小テスト
	評論 (4)	<ul style="list-style-type: none"> 論の展開を正確に把握し、筆者の主張を読み取る。 言語に関心を持ち、言語の特徴について考える力を養う。 	○				○	○	<ul style="list-style-type: none"> 叙述に即して内容を読み取っている。 構成を把握し、筆者の主張を読み取っている。 国語や言語文化に関心を持ち、言語の役割について考えようとしている。 	<ul style="list-style-type: none"> チェックシート 言葉の小テスト 行動観察 行動観察
	定期考査		○			○	○	○		
12	小論文2 「言葉のおもしろさ」 (4)	<ul style="list-style-type: none"> 日本語の特徴についての話を聞いて、話の内容を理解する。 具体例を挙げながら、日本語の特徴について話し合い、理解を深める。 自分の考えを読み手に納得させるように書く。 	○	○	○			○	<ul style="list-style-type: none"> 例話を正確に聞き取っている。 日本語の特徴について、具体例を挙げながら述べられている。 具体例と主張の配置の仕方を工夫して書いている。 	<ul style="list-style-type: none"> チェックシート 行動観察 小論文評価
	古文 和歌 (8)	<ul style="list-style-type: none"> 三大和歌集の歌人や歌の特徴について理解する。 和歌の修辞法を理解する。 和歌に詠まれた作者の感動を読み取る。 	○			○	○	○	<ul style="list-style-type: none"> 三大和歌集の歌人や歌の特徴について理解している。 和歌の修辞法について理解している。 叙述に即して内容を理解し、和歌を読み味わっている。 	<ul style="list-style-type: none"> 小テスト チェックシート 行動観察
1	小説 「カプリンスキー氏」 (6)	<ul style="list-style-type: none"> 人物の心情や考えに注意しながら、内容を的確に読み取る。 小説を通じて、人間の心のあり方や社会との関わりについて考える。 小説を読んで意見文を書く。 	○		○	○	○	○	<ul style="list-style-type: none"> 表現に即して人物の心情や考えを読み取っている。 小説の主題を読み取っている。 人間と社会の関わりについて考えている。 根拠を明らかにして自分の意見を的確に述べている。 	<ul style="list-style-type: none"> チェックシート 行動観察 意見文評価
	漢文 思想 (6)	<ul style="list-style-type: none"> 日本に影響を与えた古代中国の思想を理解する。 訓読の基本を確認し、漢文語彙を広げる。 心に残る「論語」の一節について、解説文を書く。 	○			○	○	○	<ul style="list-style-type: none"> 訓読を手がかりに、儒家の思想を理解している。 訓読の基本が身に付き、漢文語彙の理解が進んでいる。 辞書や参考資料を使って、正確に解説している。 	<ul style="list-style-type: none"> チェックシート 小テスト (解説文相互評価)
2	討論 (8)	<ul style="list-style-type: none"> 評論を読んで、ものの見方や感じ方で共感したり発見したりしたことを発表し合う。 テーマを決めて討論する。 	○	○				○	<ul style="list-style-type: none"> 読み取った自分の共感や発見をわかりやすく話すことができる。 級友の話の聞き取ることができている。 聞き手の興味を考慮して、テーマを選んでいる。 討論における役割を決めて、それを果たしている。 	<ul style="list-style-type: none"> (相互評価) (相互評価) (相互評価) 授業者の評価 言葉の小テスト
	古文 (3)	<ul style="list-style-type: none"> 歌物語を読み、登場人物の心情を読み取る。 辞書や古典文法を駆使し、自分の力で口語訳する。 	○				○	○	<ul style="list-style-type: none"> 表現に即して心情を読み取っている。 言葉に忠実に口語訳しようとしている。 	<ul style="list-style-type: none"> 行動観察 小テスト
	定期考査		○			○	○	○		
3	表現 (4)	<ul style="list-style-type: none"> 様々な文章の書き方を学ぶ。 特定の人に向けて、自分の1年を終えての所感を書く。 	○			○	○	○	<ul style="list-style-type: none"> 様々な文章の書き方を理解している。 相手に応じた文章のスタイルを選んでいる。 	<ul style="list-style-type: none"> チェックシート (作文自己評価) 授業者の評価

(工)「読むこと」の評価規準の具体例

a 単元名 「小説」 教材「羅生門」芥川龍之介

b 単元目標

- ① 表現に即して心理を読みとり、状況で揺れ動く人間の生き方について考える。
- ② 小説を支える効果的な表現に気づき、表現の意図を的確に読み取る。
- ③ 古典を題材にした小説を読み、紹介文を書く。

c 指導計画（学習目標） 配当時間7時間

第1次 興味を持って小説と出会い、話の筋を理解する。

第2次 表現に即して下人の心理を中心に内容を理解する。

(第1・2場面 1時間 第3・4場面 1時間)

第3次 何が下人の心理を動かしたかを考察し、人間の生き方について考える。

第4次 原典との比較を通して、主題について考える。

第5次 小説を支える効果的な表現に気づき、表現の意図を読み取る。

第6次 古典に題材を採った短編小説の紹介文を書く。

d 単元の展開と評価規準及び評価方法

時間	学習活動	評価規準	評価方法
1	<ul style="list-style-type: none"> ・黙読する。 ・おもしろいと思ったところを5行以内で書き出す。 ・書き出した箇所を朗読する。聞いて傍線を引く。 ・プリント「これはどこに書かれていたか」に沿って筋の展開を発表し合う。(資料1) 	<ul style="list-style-type: none"> ・興味を持って小説を読もうとしている。 ・言葉や漢字を正確に読むことができる。 ・表現に即して小説の筋をつかむことができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・プリントを回収し確認する。 ・言葉の小テストをする。(第6時に行う) ・一定時間内に見つけられたか、観察する。
2	<ul style="list-style-type: none"> ・第1・2場面の内容読解のプリントに書き込む。(資料2) 背景・情景・心理 ・発表する。 解答が明らかなのは1名、自分の言葉で表したところは5～6名発表する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・作者や作品の背景について知っている。 ・小説の言葉を抜き出しながら、内容を的確に読み取っている。 ・理解したことを、的確な言葉で表している。 ・必要に応じて、内容を要約している。 	<ul style="list-style-type: none"> ・チェックシートで確認する。(第4時に行う) ・定期考査で内容理解の程度を見る。
3	<ul style="list-style-type: none"> ・第3・4場面の内容読解のプリントに書き込む。 心理・主題 ・発表する。 解答が明らかなのは1名、自分の言葉で表したところは5～6名発表する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・小説の言葉を抜き出しながら、内容を的確に読み取っている。 ・理解したことを、的確な言葉で表している。 ・必要に応じて、内容を要約している。 ・表現に即して主題を読み取っている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・チェックシートで確認する。(第4時に行う) ・定期考査で内容理解の程度を見る。

4	<ul style="list-style-type: none"> ・チェックシートに下人の心理の変化を簡潔にまとめる。 ・心理から心理への変化の要因を表現に即してまとめる。(資料3) ・発表する。 ・「善悪の判断が急激に動くのはなぜか」について意見を述べる。プリントに自分の考えを書く。 	<ul style="list-style-type: none"> ・読み取ったことを的確な言葉で表現している。 ・表現を関連づけて読みとっている。 ・人物の心情について深く読み味わっている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・チェックシートで確認する。 ・プリント作業，発表の態度を観察する。 ・プリントを回収し，意見の書き方を見る。
5	<ul style="list-style-type: none"> ・プリントを読んで，主題のとらえ方について，様々な書き方ができることを知る。 ・原典と読み比べる。 ・プリントに違いを書き込んでいく。 ・原典との違いが作品世界に及ぼした影響について意見を述べる。自分の意見をプリントに書く。 	<ul style="list-style-type: none"> ・小説の主題について深く読み味わっている。 ・原典と比較して，その違いを的確に読み取っている。 ・読み比べることで，作品世界が広がったり深まったりしている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・プリントを読む態度を観察する。 ・プリントに書き込む態度を観察する。 ・プリントを回収し，意見の書き方を見る。
6	<ul style="list-style-type: none"> ・印象に残った表現，効果的だと感じた表現，独特だと感じた表現を出し合う。 ・様々な表現を，その表現意図によって分類してみる。(資料4) 	<ul style="list-style-type: none"> ・効果的な表現について敏感に感じ取ろうとしている。 ・効果的な表現の表現意図を理解している。 ・比喩や慣用句の意味を理解している。 	<ul style="list-style-type: none"> ・プリントに書き込む態度を観察する。 ・チェックシートで確認する。 ・言葉の小テストをする。
7	<ul style="list-style-type: none"> ・古典に題材を採った他の小説を探し，紹介文を書く。 ・互いに読み合う。 	<ul style="list-style-type: none"> ・小説の味読を機に，読書への目を開かれている。 ・読み手を意識して書こうとしている。 ・わかりやすく内容を紹介している。 	<ul style="list-style-type: none"> ・紹介文の体裁になっているか見る。 ・紹介文を観点を決めて評価する。

e 単元の評価の留意点

- ① この単元では、「関心・意欲・態度」を，授業者の観察，プリント作業のはかどり具合などによって，評価することができる。
- ② この単元では、「読む能力」「知識・理解」を，プリントの書き込み方の観察，チェックシートの確認，言葉の小テスト，定期考査で評価することができる。
- ③ この単元では，朗読，発表を学習活動として取り入れているが，「話す・聞く能力」の評価は行わず，「読む能力」を主として評価する。
- ④ この単元では，「紹介文を書く」学習活動で，「書く能力」の評価を行う。ただし，「書く能力」の評価規準のうち，「読み手を意識して書くことができる」という点についてのみ，指導を行った後，評価する。

f 単元の評価の総括

A：十分満足できる B：おおむね満足できる C：努力を要する

(単元の評価の例)

学習活動	評価方法	関・意	話す聞く	書く	読む	知・理
1 読解プリント作業	行動観察	A			A	
2 心理の読みとり	チェックシート	A			A	
3 表現効果の理解	チェックシート	B			B	B
4 文学史・漢字・語句	言葉の小テスト	B				C
5 紹介文の記述	作文評価	A		B		B
評価の総括		A		B	A	B
評価の重点化					◎	○

※評価の重点化は行っても良い。(◎特に重点化する ○重点化する)

※点数化は、A : 3点 B : 2点 C : 1点とする。

※「C」がついた項目については、補助プリントを渡すなど、事後指導を行う。

g 学習活動及び評価に利用するプリント・チェックシートの例(実際のもは縦書き)

(資料1)「これはどこに書かれていたか」

あらすじを意識させずに、あらすじを答えるようにし向ける工夫。

抜き出した表現は、「主な場面」「筋の発展から考えて大切な場面」「これから考えさせることに関係の深い場面」「人物の言葉」など。

これは、どこに書かれていたか。

- ・一人の下人が、羅生門の下で雨やみを待っていた。
- ・しかし、下人は雨がやんでも、格別どうしようという当てはない。
- ・下人は、大きなくさめをして、それから、大儀そうに立ち上がった。
- ・それから、何分かの後である。
- ・しかし、その手は、次の瞬間には、もう鼻を覆うことを忘れていた。
- ・「何をしていた。言え。言わぬと、これだぞよ。」
- ・「なるほどな。死人の髪の毛を抜くということは、なんぼう悪いことかもしれぬ。」

(資料2)「小説の内容を理解するために」

一問一答式に教師主導で読解するのではなく、一人一人が、小説を読みながら、調べながら主体的に読む工夫。何を読み取ればよいのか学習者に明確になっていること、授業者が時間ごとに読む能力を評価できること、後で到達度を定期考査などで確認し評価できることなどを旨してプリントを用意する。

「羅生門」の内容を理解するために

《 》には、調べたことを。()には教科書から抜き出したことを。

[]には、内容を簡潔にまとめて。

< >には自分で的確な言葉を考えて。

【作者と作品について】(国語便覧を参照) 省略

【小説の背景について】 省略

【下人の心理 第1場面】

下人は羅生門の下で雨やみを待っていた。しかし、下人は、雨がやんでも格別どうしようという当てはない。なぜなら、(1)からである。だが、下人が なにか悪いことをしたわけではない。京都の町が荒れ果てていたので、(2)として、気の毒な境遇に陥ったわけである。だから、そのときの下人の様子は、雨やみを待っていたというよりも、(3)といった方が適当である。

雨、(4)という時刻も、このときの下人の(5)という気持ちを一層高めたことだろう。

行く当てのない下人は、ぼんやり雨の降るのを眺めて、同じことを繰り返し考えながら、何かを決断できずにいた。このときの下人の考えを順を追ってまとめてみると、〔6〕となる。

さて、作者はここで「勇気」という言葉を用いている。この勇気とは、(7)という勇気だが、こういうことを普通勇気というのだろうか。このことについて、私は(8)と考える。この勇気の出ない下人を、私は(9)と思う。

- (資料3)「下人の心理のまとめと心理を動かしたものを整理する」(チェックシートを兼ねる)
- () ①～⑫の心理が書き込めたかどうかチェックする。8以上をA, 4以下をCと評価する。
[] に記入する。心理を動かした要因及び◎は次の学習。

「下人の心理の変化を簡潔にまとめよう。」

学習1 : () ①～⑫に、下人の心理を入れてみよう。(確認)

学習2 : [] に、下人の心理を動かした要因となるものを書いてみよう。

- 【第1場面】 ↓← [行く当てがない状況]
- (① _____ に暮れていた)
- ↓
- (② _____ 挙げ句に _____ 勇気が出ずにいた)
- ↓← [_____]
- ③ あきらめ
- 【第2場面】 ↓← [楼の上に何かいると気づく]
- ④ 不審
- ↓← [_____]
- (⑤ _____ と _____)
- ↓← [_____]
- (⑥ _____)

↓← [老婆の着物と抜き取った髪の毛をもって逃げる]

↓

(⑫ 想像で書く : _____)

◎ どういうものが下人の心理を急激に動かしているか。

◎ _____
心理の変化でなるほどと納得するところ

◎ _____
心理の変化でなぜそうなるのかわからないところ

◎ _____
人はどんなときに善悪の判断が急激に変わるか

◎ _____
自分は小説の主題をどのように考えるか

- (資料4)「様々な表現の効果」

「様々な表現の効果」

この小説には様々な表現上の工夫が施されています。

みなさんはどんな表現効果に気づきましたか。

「印象に残った表現」「効果的だと思った表現」「独特だと思った表現」を抜き出してみましよう。

それらを、表現意図・表現効果によって分類してみましよう。

○自分で抜き出しましょう。
 () _____ () _____

○発表を聞いて、上に無かった表現を書き込みましょう。
 () _____ () _____

○この小説には、次のような仕掛けがしてあります。上記の表現は次のどれに当たりますか。
 () の中に番号を入れましょう。

1 時間の推移を表す表現	5 動作をリアルに見せる表現
2 下人の心情を支える表現	6 人物を生き生きと見せる表現
3 臨場感を持たせる表現	7 主題を暗示する表現
4 視点を変える表現	8 時代を感じさせる表現

(チェックシート)

5つの項目のうち、A：4以上正解 B：3～2 C：1～0

○ 次の表現は、小説の中でどのような効果を持っていましたか。

1 右のほおにできた、大きなきびを気にしながら、	()
2 きりぎりすも、もうどこかへ行ってしまった。	()
3 やもりのように足音をぬすんで、	()
4 まぶたの赤くなった、肉食鳥のような、鋭い目	()
5 ただ、黒洞々たる夜があるばかりである。	()

(オ) 評定への総括

a 定期考査ごとに総括する方法

定期考査までの単元をまとめて、5つの観点別評価の総括を出し、点数化する。このとき、観点別評価の重点化も必要に応じて行う。定期考査ごとに、定期考査と観点別評価との割合を決めて、100点に換算する。学年末に平均を出して、評定をつける。

b 学年末にまとめて総括する方法

5つの観点別に、それぞれの評価対象となった単元すべてを総括し、年間通しての観点別評価を出す。これを点数化する。このとき、必要に応じて観点別評価の重点化を行う。重点化には、授業時間数や単元の数を考慮する。最終的に、定期考査と観点別評価との割合を決めて、100点に換算する。例えば、右表

年間の単元一覧と評価の観点(例)

単元名 (時数)	時間 数	関心 意欲 態度	評価の観点			知識 理解
			話す 聞く 能力	書く 能力	読む 能力	
国語入門	2	○	○	○	○	○
随筆	2	○	○	○	○	○
古文入門1	8	○	○	○	○	○
定期考査	1	○	○	○	○	○
小説	4	○	○	○	○	○
漢文入門	8	○	○	○	○	○
評定	9	○	○	○	○	○
定期考査	1	○	○	○	○	○
小論文1	3	○	○	○	○	○
古文入門2	8	○	○	○	○	○
詩	6	○	○	○	○	○
小説	6	○	○	○	○	○
随筆	6	○	○	○	○	○
定期考査	1	○	○	○	○	○
短歌・俳句	8	○	○	○	○	○
古文入門3	8	○	○	○	○	○
漢文	6	○	○	○	○	○
評定	4	○	○	○	○	○
定期考査	1	○	○	○	○	○
小論文2	4	○	○	○	○	○
古文	8	○	○	○	○	○
小説	6	○	○	○	○	○
漢文	6	○	○	○	○	○
討論	4	○	○	○	○	○
古文	4	○	○	○	○	○
定期考査	1	○	○	○	○	○
表現	4	○	○	○	○	○

の単元計画によれば、「話す聞く能力」は6単元、「書く能力」は10単元、「読む能力」は17単元(現代文8、古文6、漢文5)で総括することになる。

c 評定への総括の例

a・bの方法のうち、「a 定期考査毎に総括する」の方法に従った場合の評価の例として、ここでは、前述の年間計画に従って授業を行った場合の、第1回定期考査までの総括の例を挙げる。ある生徒の評価が次のようになったとする。

(第1回考査までの事中評価)

単元名	関心・意欲・態度	話す・聞く能力	書く能力	読む能力	知識理解
国語入門	A		B		
随想	A	○B		◎A	B
古文入門	B			B	◎B
事中評価	A	B	B	○A	○B

* 事中評価（授業での評価）の総括は、各単元を総括して、観点別に行う。
その際、観点の重点化や単元の重点化を考慮して、評価を確定する。

(事中評価点数化)

	関心・意欲・態度	話す・聞く能力	書く能力	読む能力	知識理解	(合計)
事中評価	3	2	2	6	4	17

* Aを3点、Bを2点とする。重点化する(○)場合は、点数を2倍する。特に重点化する(◎)場合は、3倍する。但し、その割合は変えてもよい。

(第1回考査の出題の点数配分と本人の得点)

	関心・意欲・態度	話す・聞く能力	書く能力	読む能力	知識理解	(合計)
配点	10		10	40	40	100
得点	10		5	27	35	77

(事中評価と事後評価の総括)

事中評価と事後評価（定期考査）の割合を決める。
仮に、30点：70点とする。それに合わせて換算する。
 事中評価 17点 ÷ 21点 × 30点 = 24点
 事後評価 77点 ÷ 100点 × 70点 = 54点

(第1回考査までの評価の総括)

事中評価（30点） + 事後評価（70点）
 24点 + 54点 = 78点

(評定への総括)

上記のような手順で、各考査毎に点数化し、学年末に平均を出して年間の得点とし、評定をつける。

d 評価をうまく行うための留意点

- ① 年間計画を立てる際、どの単元で、どの観点の評価を行うかほぼ決めておく必要がある。このとき、ある程度、単元の重点化や観点別評価の重点化も考えておくとうい。
- ② 観点別評価を重点化する場合、点数化をどうするか決めておく必要がある。
- ② 定期考査は、出題のときに観点別評価を考慮して配点を決める必要がある。

(2) 地理歴史

地理歴史

ア 教科目標 (地理歴史)

我が国及び世界の形成の歴史的過程と生活・文化の地域的特色についての理解と認識を深め、国際社会に主体的に生きる民主的、平和的な国家・社会の一員として必要な自覚と資質を養う。

イ 地理歴史科の評価の観点及び趣旨

観 点	趣 旨
関心・意欲・態度	歴史的・地理的事象に対する関心と課題意識を高め、意欲的に追究するとともに、国際社会に主体的に生きる国家・社会の一員としての責任を果たそうとする。
思考・判断	歴史的・地理的事象から課題を見だし、我が国及び世界の形成の歴史的過程と生活・文化の地域的特色を世界史的視野に立って多面的・多角的に考察するとともに、国際社会の変化を踏まえ公正に判断する。
資料活用の技能・表現	諸資料を収集し、有用な情報を選択して活用することを通して歴史的・地理的事象を追究する方法を身に付けるとともに、追究し考察した過程や結果を適切に表現する。
知識・理解	我が国及び世界の形成の歴史的過程と生活・文化の地域的特色についての基本的な事柄を理解し、その知識を身に付けている。

ウ 評価方法の例

(ア) 評価のためのプロセス

世界史Aの「(2) 一体化する世界 ア 大航海時代の世界」を例に、評価規準を作成するためのプロセスを具体的に示すと、以下のa～dの通りである。

a 科目の目標、評価の観点の趣旨の把握

【学習指導要領における世界史Aの目標】

近現代史を中心とする世界の歴史を、我が国の歴史と関連付けながら理解させ、人類の課題を多角的に考察させることによって、歴史的思考力を培い、国際社会に主体的に生きる日本人としての自覚と資質を養う。

【世界史Aの評価の観点の趣旨】

関心・意欲・態度	思考・判断	資料活用の技能 ・表現	知識・理解
近現代史を中心とする世界の歴史に対する関心と課題意識を高め、意欲的に追究するとともに、国際社会に生きる国家・社会の一員としての責任を果たそうとする。	近現代史を中心とする世界史の知識をもとに、人類の課題を世界的視野に立って多面的・多角的に考察するとともに、国際社会の変化を踏まえ公正に判断する。	諸資料を収集し、有用な情報を選択して活用することを通して歴史的事象を追究する方法を身に付けるとともに、追究し考察した過程や結果を適切に表現する。	前近代史について、諸地域世界の歴史的特質と交流の様相を把握し、近現代史を理解するのに必要な基本的知識を身に付けているとともに、近現代史を中心とする世界の歴史について、我が国の歴史と関連付けながら理解し、その知識を身に付けている。

b 学習指導要領の内容、内容のまとめりごとの評価規準の把握

【「(2)一体化する世界」の内容】

<p>(2) 一体化する世界</p> <p>16世紀以降の世界商業の進展と産業革命後の資本主義の確立を中心に、世界の一体化の過程を理解させる。その際、ヨーロッパの動向と日本などアジア諸国の対応に着目させる。</p> <p>ア 大航海時代の世界</p> <p>イ アジアの諸帝国とヨーロッパの主権国家体制</p> <p>ウ ヨーロッパ・アメリカの諸革命</p> <p>エ アジア諸国の変貌と日本</p>
--

【「(2)一体化する世界」の評価規準】

関心・意欲・態度	思考・判断	資料活用の技能 ・表現	知識・理解
・16世紀以降の世界商業の進展と産業革命後の資本主義の確立を中心に世界の一体化の過程について関心を高め、意欲的に追究し、考えようとしている。	・16世紀以降の世界商業の進展と産業革命後の資本主義の確立を中心に世界の一体化の過程を考察している。 ・世界の一体化の	・画像、映像、音声資料、インターネットなどのメディアから世界の一体化に関する情報を選択し、活用して	・16世紀以降の世界商業の進展と産業革命後の資本主義の確立を中心に世界の一体化の過程を理解し、その知識を身に付けている。

・世界の一体化の過程におけるヨーロッパの動向と日本などアジア諸国の対応について関心を高め、意欲的に追究し、考えようとしている。	過程におけるヨーロッパの動向と日本などアジア諸国の対応を考察し、比較し、判断している。	いる。 ・考察した過程や結果を適切に発表したり、報告書にまとめている。	・世界の一体化の過程におけるヨーロッパの動向と日本などアジア諸国の対応を理解し、その知識を身に付けている。
---	---	--	---

c 学習指導要領の内容，内容のまとめりごとの評価の観点の重点化
【(2)「一体化する世界」の観点の重点化】

大項目 (2)「一体化する世界」		関心・意欲・態度	思考・判断	資料活用の技能・表現	知識・理解
中 項 目	大航海時代の世界	◎		○	
	アジアの諸帝国とヨーロッパの主権国家体制	○	◎		
	ヨーロッパ・アメリカの諸革命		○		◎
	アジア諸国の変貌と日本	○		◎	○

◎＝特に重点化した観点，○＝重点化した観点（空欄は評価しないということではない）

d 学習指導要領の内容，内容のまとめりごとの評価規準の検討とその具体例の作成
【「ア 大航海時代の世界」の内容】

大航海時代のヨーロッパとアフリカ，アメリカ，アジアとの接触・交流を扱い、16世紀の世界の一体化への動きを理解させる。

【「ア 大航海時代の世界」の評価規準】

関心・意欲・態度	思考・判断	資料活用の技能・表現	知識・理解
16世紀の世界の一体化への動きに対する関心を高め、具体的に追究し、考えようとしている。	16世紀の世界の一体化への動きを考察し、判断している	16世紀の世界の一体化への動きに関する資料を活用するとともに、考察した過程や結果を適切に表現している。	16世紀の世界の一体化への動きを理解し、その知識を身に付けている。

【「ア 大航海時代の世界」の評価規準の具体例】

① 関心・意欲・ 態度	② 思考・判断	③ 資料活用 の技能・表現	④ 知識・理解
<p>(7) ルネサンスと、大航海時代のヨーロッパとアフリカ、アメリカ、アジアとの接触・交流を通じた世界の一体化への歴史的過程に対する関心を高め、意欲的に追究している。</p> <p>(イ) 16世紀のヨーロッパ、アジア、アフリカ、アメリカの文化遺産について、関心を持ち、人類の貴重な歴史的遺産として尊重しようとする。</p>	<p>・ルネサンスと大航海時代の関連やヨーロッパとアフリカ、アメリカ、アジアとの接触・交流が近現代世界の形成に与えた影響について、多面的・多角的に考察し、公正に判断している。</p>	<p>(7) 16世紀の絵画・彫刻・建築等の文化遺産について様々なメディアを活用して情報を収集し活用している。</p> <p>(イ) 諸地域世界間の接触・交流に関して世界地図等を適切に活用し表現している。</p> <p>(ウ) 追究し考察した過程や結果をまとめたり、説明したりしている。</p>	<p>(7) ヨーロッパの政治、文化の新しい機運や諸国家の興隆に関する歴史的事象や、その時代的特色の知識を身に付けている。</p> <p>(イ) スペインによる新大陸の征服と開発やポルトガルによるインド航路を用いたアジア交易への参入などを理解し、人と物の交流と交易のようすを具体的にとらえ、その知識を身に付けている。</p> <p>(ウ) キリスト教の布教と受容、農作物や家畜の伝播や移動などの諸地域世界の接触と交流、一体化の過程を理解し、その知識を身に付けている。</p> <p>(イ) 大航海時代がヨーロッパの経済や国際関係に与えた影響を理解し、その知識を身に付けている。</p> <p>(オ) ロシアのシベリア進出やこの時期の我が国の積極的な海外交易活動を理解し、その知識を身に付けている。</p>

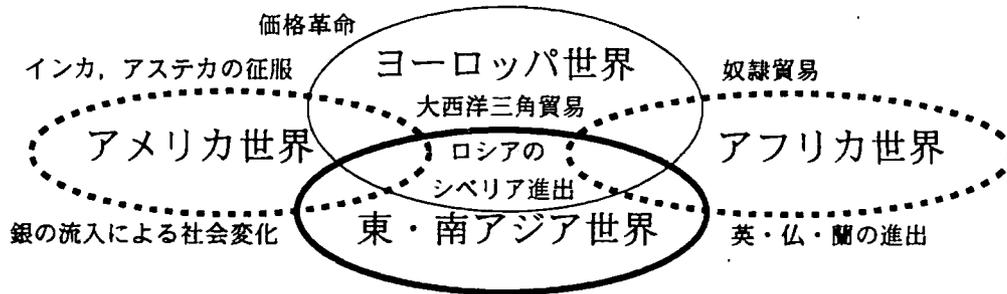
※ ①～④及び(7)～(オ)は次頁の学習指導例と評価の手だてに対応

(イ) 単元の学習指導例と評価の手だて

世界史Aの「(2) 一体化する世界 ア 大航海時代の世界」を例に、具体的な学習指導の流れと評価の手だてを示すと以下の通りである。

1 単元	「大航海時代を科学する」 (5時間)	<table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <td style="width: 60%;">「航海先に立たず」</td> <td style="width: 40%;">(1時間)</td> </tr> <tr> <td>「大航海の可能性」</td> <td>(2時間)</td> </tr> <tr> <td>「大航海が残したもの」</td> <td>(2時間)</td> </tr> </table>	「航海先に立たず」	(1時間)	「大航海の可能性」	(2時間)	「大航海が残したもの」	(2時間)
「航海先に立たず」	(1時間)							
「大航海の可能性」	(2時間)							
「大航海が残したもの」	(2時間)							
2 目標	<p>(1) 大航海時代を取り上げ、ヨーロッパ人の海外進出と諸地域世界の動向を中心に、16世紀の世界の一体化への動きを理解させる。</p> <p>(2) 中学校社会科歴史的分野で学習した我が国と東アジア世界とのかかわり、ヨーロッパ人の来航を基に、世界の一体化の過程を理解させるとともに、ヨーロッパ人の海外進出の原因と結果を考察させる。</p> <p>(3) 作業的、体験的な学習や調べ学習を通して、生徒の主体的な学習を促し、地図や資料を適切に活用し表現する力を培わせる。</p>							
3 実際 「大航海を科学する」(5時間)	*は生徒の活動を示す							
(1) 「航海先に立たず」(1時間)	<p style="text-align: center;">*ピッツァの中身を調べ、食材ごとに分類する。 ①-(7)(イ)、②</p> <p>◇ 何が必要だったか ② ----- 香辛料を持たない後進ヨーロッパ世界</p> <p style="text-align: center;">*東アジアから地中海までの地図を描き、香辛料の輸送ルートを探る ③-(イ)</p> <p>◇ どのようにして手に入れていたか ②,④-(イ)--- 東南アジアから地中海までの交易</p> <p>◇ 誰が運んだか ②,④-(イ)---- 中国、インド・イスラーム商人の海陸ネットワーク</p>							
(2) 「大航海の可能性」(2時間)	<p>□ 世界史Aの内容(イ)での既習内容</p> <p>▭ 中学校社会科歴史的分野との関連を図りやすい内容</p> <p>⋯⋯ 中学校社会科歴史的分野で削除されたため初めて取扱う内容</p>							
<div style="border: 1px dashed black; padding: 10px; margin: 10px auto; width: 80%;"> <p style="text-align: center;">イスラーム世界の拡大</p> <p>ビザンツ帝国の衰退・滅亡 *オスマントルコ、ムガル帝国の版図を地図に示す ③-(イ)</p> </div> <div style="display: flex; justify-content: space-around; margin-top: 10px;"> <div style="border: 1px dashed black; padding: 10px; width: 30%;"> <p style="text-align: center;">ルネサンス</p> <p>*イタリアルネサンスについて説明を聞いた後、班別調べ学習を行なう ③-(7)</p> <p>*芸術作品や文化遺産を調べ、説明文を考える ①-(イ)、③-(イ)</p> <p>*班別に発表する ③-(イ)</p> </div> <div style="border: 1px solid black; padding: 10px; width: 30%; text-align: center;"> <p style="font-size: 1.2em; font-weight: bold;">大航海時代</p> <p>*南蛮屏風をもとに帆船、南蛮人の服装、建物等に着目し、気付きをまとめる ①-(7)(イ)、②、③-(7)</p> </div> <div style="border: 1px dashed black; padding: 10px; width: 30%;"> <p style="text-align: center;">国土回復運動</p> <p>*イベリア半島における領土変遷を図示する ③-(イ)</p> <hr/> <p style="text-align: center;">宗教改革・反宗教改革</p> <p>*ザビエルの来日とヨーロッパの情勢との関連を理解する ④-(イ)(イ)</p> </div> </div>								

(3)「大航海が残したもの」(2時間)----- 諸地域世界の接触と交流の結果を予測する ②



- * 班別にそれぞれの諸地域世界を選択し、他の地域世界とのかかわりを話し合う ①-(7), ②
- * 班別に選択した諸地域世界が他の地域世界に与えた影響をまとめ発表する ③-(7)
- * 諸地域世界の接触と交流の結果をレポートにまとめる ②, ④-(7) (4) (7) (1) (4)

(ウ) 単元における評価の方法と評価の具体例

a 評価の方法

- (a) 評価する主体による分類 自己評価, 他者評価, 相互評価等
- (b) 評価の目的に応じた分類 診断的評価, 形成的評価, 総括的評価等
- (c) 評価の形態等による分類 観察法, 質問紙法, パフォーマンスアセスメント
ポートフォリオアセスメント等
- (d) 評価の基準等による分類 目標準拠評価 (絶対評価), 集団準拠評価 (相対評価), 個人内評価等

b 小単元における観点別学習状況の評価の具体例

「(1) 航海先に立たず」を例に

評価の観点	具体的な観点別学習内容	評価の基準 (A, B, C三段階におけるBの基準)
◎関心・意欲・態度	ピッツァの中身を調べ、様々な観点から食材を分類する。	・班員と協力して中身を分類し、食材がヨーロッパに流入した時代や背景を追究できる。
○思考・判断	何が必要だったか、どのように手に入れたかを考察する。	・ヨーロッパとアジア, アフリカ, アメリカとの交易の過程を, 歴史的, 地理的に大まかに考察できる。
資料活用の技能・表現	地図を描き, 香辛料の輸送ルートを探る。	・地図資料を活用してヨーロッパ, アジア, アフリカの白地図を大まかに描き, 輸送ルートを記入できる。
知識・理解	中国・インド・イスラーム商人の海陸ネットワークを知る。	・16世紀以前から海陸の交易ネットワークがあり, そこにヨーロッパ人が参入していった過程を理解できる。

◎=特に重点化した観点, ○=重点化した観点

(a) 同様に「大航海の可能性」、「大航海が残したもの」についても学習の活動に基づいて観点別の評価の基準を作成する。

(b) 評価の基準

A	十分満足できると判断されるもの
B	おおむね満足できると判断されるもの
C	努力を要すると判断されるもの

(c) 評価の基準を設定する際の配慮事項

- ・評価の観点については、生徒の既習内容との関連を十分に考慮し、指導計画に基づいて必要に応じて観点を重点化を図ること。
- ・教育課程の改訂、実施にともない、中学校社会科における学習内容が従前と大きく異なっている。このため地理歴史科で新出する内容については、基準の設定を生徒の学習の実態に応じて設定するなど、配慮、再考する必要があること。

c 観点別学習状況の評価の総括の具体例

単元「大航海時代を科学する」	関心・意欲 ・態度	思考・判断	資料活用の 技能・表現	知識・理解
(1) 航海先に立たず	◎ A	○ A	B	B
(2) 大航海の可能性	○ B	A	◎ B	A
(3) 大航海が残したもの	A	◎ C	A	○ A
単元の総括におけるペーパーテスト	A	○ B	A	◎ A
総 括	A	B	B	A

◎=特に重点化した観点、○=重点化した観点

(a) 観点別学習状況の評価の総括における配慮事項

- ・総括の具体例 A, A なら A, A, B なら B, A, B, C なら B
◎A, B なら A, ○A, B なら A
A, A, ◎C なら B, A, A, ○C なら B など
- ・同様に各單元ごとに観点別評価を総括していく。
- ・單元ごとのペーパーテストや定期考査についてもできる限り観点別評価を行い総括していく（「知識・理解」のみに偏らないための工夫改善が必要。）
- ・重点化しない場合の評定への総括については、「評価規準の作成、評価方法の工夫改善のための参考資料（小・中学校）第一編総説」（国立教育政策研究所）を参照のこと。

- ・観点の重点化は、評価の具体的観点とともに、生徒にあらかじめ明示しておくこと。

(工) 観点別学習状況の評価 (A, B, C) の5段階評定への総括

a 各観点別学習状況の評価の数値化

観点別学習状況の評価 (A, B, C) を数値を決める。

A : 3点 B : 2点 C : 1点

(A, B, Cそれぞれの数値は必ずしもこの数値とは限らず、実態に応じて設定)

b 総括された観点別学習状況の評価の5段階評定への換算

観点別評価の評定への総括の例

単元	関・意 ・態	思 ・判	技 ・表	知 ・理
単元1	B	A	A	B
単元2	A	A	B	A
単元3	A	C	B	A
定期考査	A	B	A	A
3段階評定 点数(値)	A 3	B 2	B 2	A 3
5段階評定	点数計10 = 評定4			

5段階評定への換算例

観点別評価	点数計	評定
AAAA	12	5
AAAB	11	
AABB, AAAC	10	4
ABBB, AABC	9	3
BBBB, ACBB	8	
ACAC		
BBBC, ABCC	7	2
BBCC, ACCC	6	
BCCC	5	1
CCCC	4	

- ・各単元の重み付け、定期考査との割合については、学校や生徒の実態にあわせて決定する。
- ・総括の方法については、各観点ごとの達成度を求め、その平均値をもとに評定をおこなう方法もある。
- ・簡易で有効な総括の方法についても今後の研究、検討が必要である。

エ 留意事項

- (ア) 評価にあたっては、地理歴史科の各科目の特質や目標にあわせて、年間指導計画をもとに長期的かつ総合的な評価計画を策定する必要がある。
- (イ) 評価規準の作成においては、単元の指導目標やねらい及び内容の取り扱いを考慮し、複雑で詳細な評価項目にならないように配慮するとともに、指導と評価の一体化を図

(3) 公 民

公 民

ア 教科目標（公民）

広い視野に立って、現代の社会について主体的に考察させ、理解を深めさせるとともに、人間としての在り方生き方についての自覚を育て、民主的、平和的な国家・社会の有為な形成者として必要な公民としての資質を養う。

イ 公民科の評価の観点及び趣旨

観 点	趣 旨
関心・意欲・態度	現代の社会と人間にかかわる事柄に対する関心を高め、意欲的に課題を追究するとともに、民主的・平和的なよりよい社会の実現に向けて参加、協力する態度を身に付け人間としての在り方生き方についての自覚を深めようとする。
思考・判断	現代の社会と人間にかかわる事柄から課題を見だし、社会的事象の本質や人間の存在及び価値などについて広い視野に立って多面的・多角的に考察するとともに、社会の変化や様々な考え方を踏まえ公正に判断する。
資料活用の技能・表現	諸資料を収集し、有用な情報を主体的に選択して活用するとともに、追究し考察した過程や結果を適切に表現する。
知識・理解	現代の社会的事象と人間としての在り方生き方にかかわる基本的な事柄を理解し、その知識を身に付けている。

ウ 評価方法の例

(7) 評価のためのプロセス

倫理の大項目「(2) 現代と倫理」の中項目「イ 現代に生きる人間の倫理」を例に、評価規準の作成のためのプロセスの一例を示すと、以下の①～④の通りとなる。

① 科目の目標、評価の観点の趣旨を把握する。

【学習指導要領における倫理の目標】

人間尊重の精神に基づいて、青年期における自己形成と人間としての在り方生き方について理解と思索を深めさせるとともに、人格の形成に努める実践的意欲を高め、生きる主体としての自己の確立を促し、良識ある公民として必要な能力と態度を育てる。

るために実際の生徒の学習活動に即した評価方法を工夫する必要がある。

- (ウ) 観点別学習状況の評価においては、学習指導の前にあらかじめ生徒に、具体的な評価の観点を示しておくことが重要である。
- (エ) 地理歴史科で重視されている「適切な主題を設定し追究する学習」(主題学習)の評価については、教師の評価だけではなく生徒の自己評価、相互評価を取入れるとともに、個人内評価も必要に応じて加味するなど、総合的に評価する工夫と改善が望まれる。
- (オ) 主題学習や調べ学習などでは、活動の関心・意欲・態度や技能・表現を十分に評価し、知識・理解のみに偏らない評価方法の改善が必要である。
- (カ) 目標に達しなかった生徒については、指導経緯を振り返り、指導方法や指導内容の改善を図るとともに、生徒に自己評価を行わせ、到達し得なかった部分を補充するなどの手だてを講じる。

オ 参考文献

- 文部省 『高等学校学習指導要領解説 地理歴史編』 実教出版 1999年12月
- 国立教育政策研究所 『評価規準の作成、評価方法の工夫改善のための参考資料』
2002年2月
- 佐伯真人 他編 『高等学校新学習指導要領の解説 地理歴史』 学事出版
2000年8月
- 辰野千壽 『学習評価基本ハンドブック』 図書文化 2001年8月
- 森敏昭 他編 『教育評価』 明治図書 2000年7月
- 北尾倫彦 他編 『新 観点別学習状況の評価基準表 中学校・社会』 図書文化
2002年5月
- 教育改革研究会 編 『中学校新絶対評価の手引』 明治図書 2002年6月
- 渡澤文隆 編 『中学校社会科の絶対評価規準づくり』 明治図書 2002年6月
- 宮崎正勝 『モノの世界史』 原書房 2002年7月
- フィリップ・カーティン 『異文化間交易の世界史』 NTT出版 2002年5月

【倫理の評価の観点の趣旨】

関心・意欲・態度	思考・判断	資料活用の 技能・表現	知識・理解
人間尊重の精神と自己形成について関心を高め、人格の形成と生きる主体としての自己の確立に努める実践的意欲をもつとともに、これらにかかわる諸課題を探究する態度を身に付け、人間としての在り方生き方について自覚を深めようとする。	生きる主体としての自己の確立について広く課題を見だし、人間の存在や価値などについて多面的・多角的に考察し探究するとともに、良識ある公民として広い視野に立って主体的かつ公正に判断する。	青年期における自己形成や人間としての在り方生き方などに関する諸資料を収集し、これらを自己形成に資するよう活用するとともに、追究し考察した過程や結果を様々な方法で適切に表現する。	青年期における自己形成や人間としての在り方生き方などにかかわる基本的な事柄を、生きる主体としての自己確立の課題とつなげて理解し、人格の形成に生かす知識として身に付けている。

② 学習指導要領における大項目の内容及び構成を把握する。

【「(2) 現代と倫理」の内容】

(2) 現代と倫理	
現代に生きる人間の倫理的な課題について思索を深めさせ、自己の生き方の確立を促すとともに、よりよい国家・社会を形成し、国際社会に主体的に貢献しようとする人間としての在り方生き方について自覚を深めさせる。	
ア 現代の特質と倫理的課題	
イ 現代に生きる人間の倫理 …………… この単元を例として取り上げる	
ウ 現代の諸課題と倫理	

③ 内容のまとめり（中項目）ごとの評価の観点を重点化する。

【「(2) 現代と倫理」における評価の観点を重点化】

大項目 「(2) 現代と倫理」		関心・意欲・態度	思考・判断	技能・表現	知識・理解
中 項 目	ア 現代の特質と倫理的課題	◎	○	○	
	イ 現代に生きる人間の倫理	○	○		◎
	ウ 現代の諸課題と倫理	○	◎	○	

※ ◎=特に重点化 ○=重点化 (無印であっても評価しないということではない)

④ 内容のまとめり（中項目）ごとの評価規準及びその具体例を作成する。

【「イ 現代に生きる人間の倫理」の内容】

人間の尊厳と生命への畏敬，自然や科学技術と人間とのかかわり，民主社会における人間の在り方，社会参加と奉仕，自己実現と幸福などについて，倫理的な見方や考え方を身に付けさせ，他者と共に生きる自己の生き方にかかわる課題として考えを深めさせる。

【「イ 現代に生きる人間の倫理」の評価規準】

関心・意欲・態度	思考・判断	資料活用の技能・表現	知識・理解
現代に生きる人間が直面する諸課題に対する関心を高め，倫理的視点から意欲的に追究し，他者と共に生きる自己の生き方について考えようとしている。	現代に生きる人間が直面する諸課題について，多面的・多角的に考察し，倫理的な見方や考え方を身に付け，他者と共に生きる自己の生き方にどうかわるかを広い視野に立って主体的かつ公正に判断している。	現代に生きる人間が直面する諸課題に関する諸資料を収集・活用し，先哲などの考え方や生き方を自らの思索を深めるために活用するとともに，追究し考察した過程や結果を様々な方法で適切に表現している。	現代に生きる人間が直面する諸課題について，自己の生き方とつなげて理解し，人格の形成に生かす知識として身に付けている。

【「イ 現代に生きる人間の倫理」の評価規準の具体例】

①関心・意欲・態度	②思考・判断	③資料活用の技能・表現	④知識・理解
(7) 現代に生きる人間が直面する諸課題に対して倫理的視点から関心が高まっている。 (イ) 現代に生きる人間が直面する諸課題を倫理的な見方や考え方から意欲的に追究している。 (ウ) 現代に生きる人間が直面する諸課題について	(7) 現代に生きる人間が直面する諸課題を，他者と共に生きる自己の生き方にかかわる課題として，見いだしている。 (イ) 現代に生きる人間が直面する諸課題について，倫理的な見方や考え方から多	(7) 現代に生きる人間が直面する諸課題に関する諸資料を，倫理的視点から，様々なメディアを通して収集している。 (イ) 収集した資料の中から，他者と共に生きる自己の生き方にかかわる課題を探究する学習に役立つ情報を主体的かつ適切に選択し活用してい	(7) 「人間の尊厳と生命への畏敬」について，人間の存在や人間の力を超えたものの観点から，人間の尊厳の根拠や生命の深遠さを理解し，人格の形成に生かす知識として身に付けている。 (イ) 「自然や科学技術と人間とのかかわり」について，人間がよりよく生きていくためには何が重要かという観点から，自然と人間とのかかわり，科学技術の発達の意義や問題点を理解し，人格の形成に生かす知識として身に付けている。 (ウ) 「民主社会における人間の在り方」について，社会と個人との関係

<p>て、他者と共に生きる自己の生き方にかかわる課題として主体的に考えようとしている。</p>	<p>面的・多角的に考察している。 (ウ) 他者と共に生きる自己の生き方について探究し、主体的かつ公正に判している。</p>	<p>る。 (ウ) 先哲などの考え方や生き方に関する諸資料を、倫理的な見方や考え方を深めるために適切に活用している。 (イ) 現代に生きる人間が直面する諸課題を、倫理的視点から追究し考察した過程や結果をノートなどにまとめたり、発表や討論などを行ったりしている。</p>	<p>の観点から、一人一人のものの見方や考え方、価値観を尊重し合うことの大切さを理解し、人格の形成に生かす知識として身に付けている。 (イ) 「社会参加と奉仕」について、社会的存在としての人間の生き方の観点から、主体的に社会に参加することの大切さを理解し、人格の形成に生かす知識として身に付けている。 (ウ) 「自己実現と幸福」について、よりよく生きることや生きがいの観点から、自己のみならず社会全体の幸福の実現の大切さを理解し、人格の形成に生かす知識として身に付けている。</p>
---	--	--	---

※ ①～④及び(7)～(ウ)は次頁の学習指導例と評価の手だてに対応

(4) 単元の学習指導例と評価の手だて

倫理の「(2) イ 現代に生きる人間の倫理」を例に、具体的な学習指導の流れと評価の手だてを示すと、以下の通りとなる。

1 単元名	<table border="1"> <tr> <td data-bbox="432 1278 805 1506" rowspan="5"> 「現代社会を生きる倫理」 (10時間) </td> <td data-bbox="805 1278 1302 1322">「人間の尊厳と生命への畏敬」(2時間)</td> </tr> <tr> <td data-bbox="805 1322 1302 1367">「自然や科学技術と人間」(2時間)</td> </tr> <tr> <td data-bbox="805 1367 1302 1411">「民主社会における人間」(2時間)</td> </tr> <tr> <td data-bbox="805 1411 1302 1455">「社会参加と奉仕」(2時間)</td> </tr> <tr> <td data-bbox="805 1455 1302 1506">「自己実現と幸福」(2時間)</td> </tr> </table>	「現代社会を生きる倫理」 (10時間)	「人間の尊厳と生命への畏敬」(2時間)	「自然や科学技術と人間」(2時間)	「民主社会における人間」(2時間)	「社会参加と奉仕」(2時間)	「自己実現と幸福」(2時間)
「現代社会を生きる倫理」 (10時間)	「人間の尊厳と生命への畏敬」(2時間)						
	「自然や科学技術と人間」(2時間)						
	「民主社会における人間」(2時間)						
	「社会参加と奉仕」(2時間)						
	「自己実現と幸福」(2時間)						
2 単元の目標	<p>(1) 人間の尊厳と生命への畏敬、自然や科学技術と人間とのかかわり、民主社会における人間の在り方、社会参加と奉仕、自己実現と幸福などの諸課題について、倫理的な見方や考え方を培う。</p> <p>(2) 上記の諸課題について、他者と共に生きる自己の生き方にかかわる課題として考えを深めさせる。</p> <p>(3) 研究レポートの作成、研究発表や研究レポート集の製作を通して、自己の研究成果と他の生徒の研究成果を合わせて考察し、理解を深めさせる。</p>						
3 実際 「現代社会を生きる倫理」(10時間)	*は生徒の活動を示す						
(1) 「人間の尊厳と生命への畏敬」(2時間)							

◇ 先哲が人間をどのようにとらえ、人間の尊厳についてどこに根拠を求め、どのように考えたかを手掛かりとして、生徒に理解を深めさせる。

*授業ノートを整理し、研究発表を相互に行う。①-(ウ)、②-(7)(イ)(ウ)、③-(イ)、④-(7)

◆ エラスムス、ルター、カルヴァン、パスカル、モンテーニュなどの先哲の中からひとりを選択させ調べさせる。

*先哲についての研究レポートを作成する。①-(7)(イ)、③-(7)(イ)(ウ)、④-(7)

(2) 「自然や科学技術と人間」(2時間)

◇ 人間と自然とのかかわりについて、先哲の基本的な考え方を手掛かりにして、生徒に理解を深めさせる。この際、現代の科学技術の根底にある基本的な見方や考え方を理解させるにとどめる。

*授業ノートを整理し、研究発表を相互に行う。①-(ウ)、②-(7)(イ)(ウ)、③-(イ)、④-(イ)

◆ ガリレイ、ベーコン、デカルト、ニュートンなどの先哲の中からひとりを選択させて調べさせる。

*先哲についての研究レポートを作成する。①-(7)(イ)、③-(7)(イ)(ウ)、④-(イ)

(3) 「民主社会における人間」(2時間)

◇ 民主社会の形成の基礎となった先哲の思想を手掛かりにして、その基本的な在り方を考えさせる。

*授業ノートを整理し、研究発表を相互に行う。①-(ウ)、②-(7)(イ)(ウ)、③-(イ)、④-(ウ)

◆ ホッブズ、ロック、ルソー、モンテスキュー、マルクスなどの先哲の中からひとりを選択させて調べさせる。

*先哲についての研究レポートを作成する。①-(7)(イ)、③-(7)(イ)(ウ)、④-(ウ)

(4) 「社会参加と奉仕」(2時間)

◇ これまで日本や世界の中で社会に貢献した先人などを紹介して、主体的に社会に参加することの大切さについて、考えを深めさせる。

*授業ノートを整理し、研究発表を相互に行う。①-(ウ)、②-(7)(イ)(ウ)、③-(イ)、④-(イ)

◆ サルトル、マザー=テレサ、シュヴァイツァー、ガンディーなどの先哲の中からひとりを選択させて調べさせる。

*先哲についての研究レポートを作成する。①-(7)(イ)、③-(7)(イ)(ウ)、④-(イ)

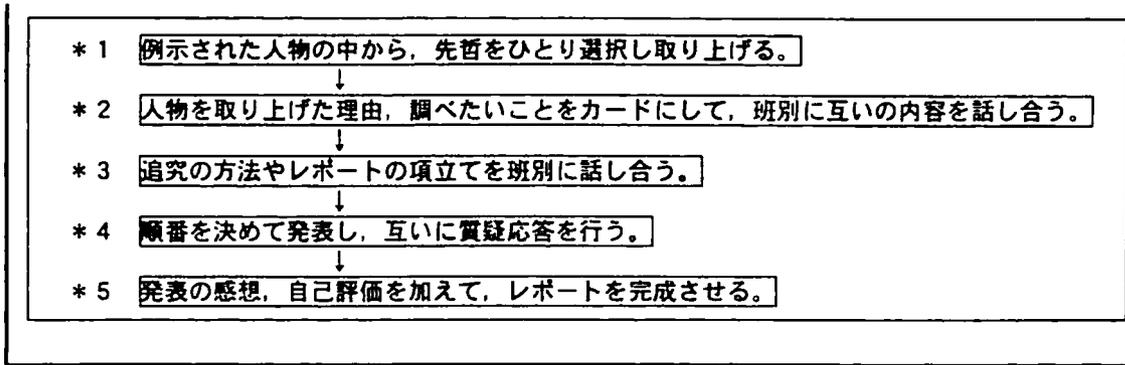
(5) 「自己実現と幸福」(2時間)

◇ 幸福についての先哲の考え方について、幾つかの角度から取り上げ、個人や社会全体の幸福について考えさせる。

*授業ノートを整理し、研究発表を相互に行う。①-(ウ)、②-(7)(イ)(ウ)、③-(イ)、④-(イ)

◆ カント、ヘーゲル、ベンサム、ミル、キルケゴール、デューイなどの先哲の中からひとりを選択させて調べる。

*先哲についての研究レポートを作成する。①-(7)(イ)、③-(7)(イ)(ウ)、④-(イ)



(9) 単元における評価の方法と評価の基準

a 評価の方法

- (a) 評価する主体による分類 自己評価, 他者評価, 相互評価等
- (b) 評価の目的に応じた分類 診断的評価, 形成的評価, 総括的評価等
- (c) 評価の形態等による分類 観察法, 質問紙法, パフォーマンスアセスメント, ポートフォリオアセスメント等
- (d) 評価の基準等による分類 目標準拠評価 (絶対評価), 集団準拠評価 (相対評価), 個人内評価等

b 観点別学習状況の評価の具体例

(a) 「自然や科学技術と人間」を例に (デカルトを選択した場合)

評価の観点	具体的な観点別学習内容	評価の基準(A・B・C三段階におけるBの基準)
関心・意欲・態度	興味・関心のある先哲について、ひとりを選択して研究する。	デカルトの合理論とベーコンの経験論との相違について、班別に協議をしながら主体的に追究しようとする。
思考・判断	選択した先哲の思想についての研究成果を相互に発表しあう。	デカルトの合理論とベーコンの経験論とついてその違いに気付き、それぞれの著作における論旨を比較し列挙できる。
○資料活用の技能・表現	選択した先哲についての資料を収集し、研究レポートを作成する。	デカルトの著作『方法序説』等について、図書館やインターネット等を利用して資料を収集し、レポートにまとめることができる。
◎知識・理解	合理論と経験論、演繹法と帰納法の相違などを理解する。	デカルトの合理論・演繹法について、方法的懐疑や「われ思う、ゆえにわれあり」の意味や考え方を理解している。

※ ◎=特に重点化 ○=重点化 (無印であっても評価しないということではない)

※ 同様に「人間の尊厳と生命への畏敬」「民主社会における人間」「社会参加と奉仕」「自己実現と幸福」についても学習活動に基づいて観点別の評価の基準を作成する。

※ 評価の基準

A	十分満足できると判断されるもの
B	おおむね満足できると判断されるもの
C	努力を要すると判断されるもの

(b) 評価の基準を設定する際の配慮事項

- ・評価の観点については、生徒の既習内容との関連を十分に考慮したうえで、指導計画に基づいて設定し、必要に応じて観点を重点化を図ること
- ・教育課程の改訂・実施にともない、中学校社会科における学習内容が従前と大きく異なっている。このため公民科で新出する内容については、基準の設定を生徒の学習の実態に応じて設定するなど、配慮・再考する必要があること

c 観点別学習状況の評価の総括

(a) 倫理の「(2) イ 現代に生きる人間の倫理」を例に

単元「現代社会を生きる倫理」	関心・意欲 ・態度	思考・判断	技能・表現	知識・理解
(1) 人間の尊厳と生命への畏敬	○ A	◎ A	B	B
(2) 自然や科学技術と人間	A	A	○ B	◎ B
(3) 民主社会における人間	◎ B	B	B	○ B
(4) 社会参加と奉仕	◎ C	A	○ A	A
(5) 自己実現と幸福	A	B	◎ B	C
単元の総括における ペーパーテスト	A	○ B	A	◎ A
総括	B	A	B	B

※ ◎=特に重点化 ○=重点化 (無印であっても評価しないということではない)

※ 観点ごとの評価を総括する際の具体例

AAならA	◎ ABならA	○ ABならA	ABならB	ACならB	ABCならB
-------	------------	------------	-------	-------	--------

(b) 観点ごとの評価の総括における配慮事項

- ・重点化しない場合の総括については、「評価規準の作成，評価方法の工夫改善のための参考資料（小・中学校）第1編総説」（国立教育政策研究所）を参照のこと。
- ・観点の重点化は，評価の具体的観点とともに，生徒にあらかじめ明示しておくこと。
- ・ペーパーテストによる評価も「知識・理解」のみに偏らないための工夫・改善が必要であること。

(I) 観点別学習状況の評価（A，B，C）から5段階評定への総括の手順

a 観点別学習状況の評価の数値化

観点別学習状況の評価（A，B，C）を数値化する。

A：3点 B：2点 C：1点
 （A，B，Cそれぞれの数値は必ずしもこの数値とは限らず，実態に応じて設定する）

b 総括された観点別学習状況の評価の5段階評定への換算

【観点別評価の評定への総括の例】

単元	関・意 ・態	思 ・判	技 ・表	知 ・理
単元1	B	A	A	B
単元2	B	A	B	A
単元3	A	C	B	A
定期考査	A	B	A	A
3段階評定 点数(値)	B 2	B 2	B 2	A 3
5段階評定	点数計9 = 評定3			

【5段階評定への換算例】

観点別評価	点数計	評定
AAAA	12	5
AAAB	11	
AABB, AAAC	10	4
ABBB, AABC	9	3
BBBB, ACBB	8	
ACAC BBBC, ABCC	7	
BBCC, ACCC	6	2
BCCC	5	1
CCCC	4	

※ 各単元の重み付け，定期考査との割合については，学校や生徒の実態にあわせて決定する。

※ 総括の方法については，各観点ごとの達成度を求め，その平均値をもとに評定を行う方法もある。

※ 簡易で有効な総括の方法についても，今後の研究・検討が必要である。

エ 留意事項

- (7) 評価にあたっては、公民科の各科目の特質、評価の場面、生徒の発達段階等に応じて、観察・ワークシート・ペーパーテスト・レポート・ノート・発表などの多様な評価手段から、その学習場面における学習状況を的確に把握できる評価方法を選択する必要がある。
- (イ) 評価規準を作成するにあたっては、学習指導要領に示された単元の目標やねらい、内容の取り扱い等を踏まえて作成し、「指導と評価の一体化」を図るために、実際の指導や生徒の学習活動に即した評価項目や評価方法を設定することが重要である。
- (ロ) 評価項目を設定する際には、学習過程における具体的な教材（題材）や学習活動を明らかにしておく必要がある。
- (ハ) 学習活動（内容）ごとに、常に4つの評価の観点を設定しなければならないということではない。評価のための指導とならないよう、また、評価が机上のプランに陥らないよう、観点の重点化を図ることも大切である。
- (ニ) 公民科においては、生徒の内面的な変容を注意深く観察することが大切であるが、観察法は客観性の面での課題が指摘されている。客観性を確保するために、多様な観察場面や視点等を設定しておく必要がある。
- (ホ) 目標に到達しなかった生徒については、指導経過を振り返り、指導方法や指導内容の改善を図るとともに、生徒に自己評価を行わせ、到達しなかった部分を補充するなどの手だてを講じることが大切である。

オ 参考文献

- 高等学校学習指導要領 文部省（平成11年3月）
- 高等学校学習指導要領解説 公民編 文部省（平成11年12月）
- 評価規準の作成、評価方法の工夫改善のための参考資料
国立教育政策研究所（平成14年2月）
- 中等教育資料（平成14年5月号） 大日本図書（平成14年5月）
（新しい評価の在り方と評価方法の改善〔国語、社会（地理歴史、公民）、数学〕）

(4) 数 学

数 学

ア 教科目標

数学における基本的な概念や原理・法則の理解を深め (④)、事象を数学的に考察し処理する能力を高め (③)、数学的活動を通して創造性の基礎を培う (②) とともに、数学的な見方や考え方のよさを認識し (①,②)、それらを積極的に活用する態度を育てる (①)。

* ①～④は、下記イに示した番号の評価の観点に関連付けられることを示す。

イ 教科の評価の観点及び趣旨

観 点	趣 旨
①関心・意欲・態度	数学的活動を通して、数学の論理や体系に関心をもつとともに、数学的な見方や考え方のよさを認識し、それらを事象の考察に積極的に活用しようとする。
②数学的な見方や考え方	数学的活動を通して、数学的な見方や考え方を身に付け、事象を数学的にとらえ、論理的に考えるとともに思考の過程を振り返り多面的・発展的に考える。
③表現・処理	事象を数学的に考察し、表現し処理する仕方や推論の方法を身に付け、よりよく問題を解決する。
④知識・理解	数学における基本的な概念、原理・法則、用語・記号などを理解し、知識を身に付けている。

* 指導要録の評価の4観点「関心・意欲・態度」、「思考・判断」、「技能・表現」、「知識・理解」のうち「思考・判断」は数学における「数学的な見方や考え方」、また、「技能・表現」は数学における「表現・処理」の中に総合的に含まれるものとしてとらえている。

ウ 評価方法の例

(ア) 科目「数学Ⅰ」の目標

方程式と不等式、二次関数及び図形と計量について理解させ、基礎的な知識の習得と技能の習熟を図り、それらを的確に活用する能力を伸ばすとともに、数学的な見方や考え方のよさを認識できるようにする。

(イ) 科目「数学Ⅰ」の評価の観点の趣旨

関心・意欲・態度	数学的な見方や考え方	表現・処理	知識・理解
数学的活動を通して、方程式と不等式、二次関数及び図形と計量における考え方に関心をもつとともに、数学的な見方や考え方のよさを認識し、それらを事象の考察に活用しようとする。	数学的活動を通して、方程式と不等式、二次関数及び図形と計量における数学的な見方や考え方を身に付け、事象を数学的にとらえ、論理的に考えるとともに思考の過程を振り返り多面的・発展的に考える。	方程式と不等式、二次関数及び図形と計量において、事象を数学的に考察し、表現し処理する仕方や推論の方法を身に付け、的確に問題を解決する。	方程式と不等式、二次関数及び図形と計量における基本的な概念、原理・法則、用語・記号などを理解し、基礎的な知識を身に付けている。

(ウ) 内容のまとめりごとの評価規準と評価の具体例

a 「図形と計量」の評価規準

関心・意欲・態度	数学的な見方や考え方	表現・処理	知識・理解
角の大きさなどを用いた計量に関心をもつとともに、それらの有用性を認識し、具体的な事象の考察に活用しようとする。	角の大きさなどを用いた計量を行うための数学的な見方や考え方を身に付け、具体的な事象を考察することができる。	具体的な事象の数量の関係を三角比などを用いて表現し、図形の様々な計量を行うことができる。	直角三角形における三角比の意味、三角比を鈍角まで拡張する意義及び図形の計量の基本的な性質を理解し、基礎的な知識を身に付けている。

b 「図形と計量」の評価の具体例

小単元	学 習 活 動	評 価 規 準 (おおむね満足できる状況)			
		①関心・意欲・態度	②数学的な見方や考え方	③表現・処理	④知識・理解
ア 三角比 (ア) 正弦、 余弦、 正接	正弦、余弦、正接を直角三角形の辺の比と角との間の関係として導入し、それらの意味を理解させるとともに、その有用性を認識させる。また、角を鈍角や 0° 、	三角比に関心をもち、図形の計量に活用しようとする。	図形の相似の考え方をを用いて、直角三角形の辺の比を角との関係でとらえることができる。	直角三角形を用いて考えられる計量の問題を、三角比の記号を用いて表現し処理することができる。	正弦、余弦及び正接を直角三角形の辺の比と角との関係として理解し、基礎的な知識を身に付けている。

	<p>90° , 180° の場合まで拡張し三角比の意義を理解させる。</p> <p>鈍角までの三角比についての相互関係を扱う。三角比の値のいずれか一つが決まれば、他の三角比の値を計算できることや、90° までの三角比の表を用いて鈍角の三角比の値が求められることを理解させる。</p>	<p>三角比の相互関係に関心をもち、図や表を用いて調べようとする。</p>	<p>三角比の相互関係について考察することができる。</p>	<p>三角比の相互関係を用い、与えられた三角比の値から残りの三角比の値を求めることができる。90° までの三角比の表を用いて鈍角の三角比の値を求めることができる。</p>	<p>鈍角や0° , 90° , 180° まで拡張した三角比の意義を理解している。</p> <p>三角比の相互関係について理解し、基礎的な知識を身に付けている。</p> <p>三角比の表の意味と使い方を理解している。</p>
<p>イ 三角比 と図形 (ア) 正弦定理、 余弦定理</p>	<p>三角形ABCのそれぞれの辺と角との間に成り立つ基本的な関係として正弦定理と余弦定理を扱う。この二つの定理を三角形の決定条件と関連づけて理解させることも重要である。</p>	<p>正弦定理・余弦定理などが図形の計量の考察に有用であることに気づき、活用しようとする。</p>	<p>正弦定理・余弦定理を導く過程を論理的に考察し、構成することができる。</p>	<p>三角形の決定条件が与えられたとき、三角形の残りの要素を求めることができる。</p>	<p>正弦定理・余弦定理を三角形の決定条件と関連づけて理解し、基礎的な知識を身に付けている。</p>
<p>(イ) 図形の 計量</p>	<p>正弦定理や余弦定理などの活用場面として、平面図形や簡単な空間図形の計量を扱う。その際、三角比や正弦定理、余弦定理などが、図形の計量の考察や処理に有用であることを認識させるようにする。さらに、中学校</p>	<p>相似形の相似比と面積比・体積比の関心に気づき、図形の計量に活用しようとする。</p> <p>球の表面積や体積が様々な方法で求められることに関</p>	<p>相似形の性質や球の表面積や体積を、実験や観察を通していろいろな方法で考察することができる。</p>	<p>三角比や正弦定理・余弦定理、相似形の性質及び球の表面積や体積などを用いて平面図形や空間図形の計量を行うことができる。</p>	<p>相似形の面積比・体積比について理解し、基礎的な知識を身に付けている。</p> <p>球の表面積・体積の公式について理解し、基礎的な知識を身に付</p>

<p>から移行された相似形の面積比・体積比及び球の表面積・体積についても扱う。また、相似な立体の相似比と表面積の比及び体積比の関係についても扱う。</p>	<p>心もち、調べようとする。</p>		<p>けている。</p>
---	---------------------	--	--------------

c 「小単元における学習活動」の展開例

次に数学Ⅰの図形と計量の分野において正弦定理の応用で指導の例を示す。本時の学習活動の目標は正弦定理を適用して三角形の6つの要素(3つの角と3つの辺)のうち問題で指示された要素を求めることである。また、4観点における評価規準を括弧で示している。

単元：図形と計量 「イ 三角比と図形」 「(ア) 正弦定理, 余弦定理」

<例題>

テーマⅠ

$\triangle ABC$ において、 $A=75^\circ$ 、 $C=45^\circ$ 、 $b=6$ のとき、 c を求めよ。

↓

↓ 数学を身近な事象として捉える。

↑

↓ <数学的活動>

↑ 数学化

↓

↑

テーマⅡ

↑

川をはさんでA君とB君の家がある。A君の家から歩いて60mの地点Cに杉の木があり、測量によって $\angle CAB=75^\circ$ 、 $\angle ACB=45^\circ$ であることがわかった。A君の家とB君の家の距離はおよそ何mか。ただし、 $\sqrt{6}=2.45$ とせよ。

<練習問題>

湖岸の2地点A、Bに松の木があり、また、小島のC地点に杉の木がある。測量によって、A、B間の距離が450m、 $\angle CAB=45^\circ$ 、 $\angle CBA=105^\circ$ であることがわかった。2点B、C間の距離は何mか。

指導案（略案）

主な学習活動	評価場面と評価計画
<p>(前時の確認)</p> <ul style="list-style-type: none"> * 正弦定理 * 余弦定理 <p>(本時の内容)</p> <p><例題></p> <p>△ABCにおいて、$A = 75^\circ$、$C = 45^\circ$、$b = 6$のとき、cを求めよ。</p> <ul style="list-style-type: none"> * テーマⅠとテーマⅡの説明 * Bを求め正弦定理を適用する。 <p>* $\frac{6}{\sin 60^\circ} = \frac{c}{\sin 45^\circ}$ から、cの値を求める。</p> <ul style="list-style-type: none"> * <練習問題>をやらせる。 <p>(本時の確認)</p> <ul style="list-style-type: none"> * 本時のまとめをする。 * 必要に応じて宿題をだす。 	<ul style="list-style-type: none"> * 前時に学習した定理を確認する。 * テーマⅠとテーマⅡの同値関係に関心を示しているか。(①) * 三角形の内角の和が180°であることを利用して残りの内角Bを求め正弦定理が適用できることに気付くか。(②) * 45°、60°の三角比の値を求め、cの値を求めることができるか。(③④) * 机間巡視をする。また、生徒を指名して解法を黒板に板書させる。(①②③④) * 家庭学習などで知識の定着を図る。

*実際には4観点についてすべて評価するのではなく観点を絞って評価する。

d 評価の方法

「観点別学習状況の評価」

A	十分満足できると判断されるもの
B	おおむね満足できると判断されるもの
C	努力を要すると判断されるもの

- * 観点ごとに評価規準により、A、B、Cを記録していく。
- * 実際の記録はAとCだけでもよい。
- * 評価することが教員の過大な負担とならないように、実際には観点を絞って評価する。

	評価の観点	重み付け	評価の方法
事 中 評 価	①関心・意欲・態度	10%	生徒の反応，発言内容，学習への取り組み等を観察したり，記録したりする。また，ノートなどから予習，復習の状況を把握する。
	②数学的な見方や考え方	10%	生徒の反応，発言内容，問題演習，ノートの整理状況などを通して把握する。
	③表現・処理	10%	生徒に問題演習をさせたり，テストなどで評価する。また，ノートから問題解決の過程を見る。
	④知識・理解	10%	課題考査，小テストなどの数量的なもので測定し評価する。また，課題・宿題などで評価する。
事後 評価	②，③，④の観点と して捉える	60%	定期考査（中間・期末） ②を10%，③を20%，④を30%とする。

* ①～④の観点の重み付け（比率）は，単元ごとに各学校の教育目標や生徒の実態に応じて適切に定める。

e 「評価Aと判断する視点と評価Cの生徒への手だて」の例

小単元	評価Aと判断する視点				評価Cの 生徒への 手だて
	①関心・意欲・ 態度	②数学的な見方 や考え方	③表現・処理	④知識・理解	
イ(ア) 正弦定 理， 余弦定 理	正弦定理，余弦定理を用いた数多くの問題に意欲的に取り組む。自分に納得のいかない事柄について積極的に質問する。ノートなどに参考書，問題集の練習問題をたくさん解いている。	発想が豊かで1つの問題をいろいろな解法で解くことができる。物事を論理的に考え最も簡単で手間のかからない解法を探り，能率的に問題解決する。	ノートなどに図形を正確に図示し，定理を発展的に適用し，的確に問題解決する。数学記号の意味をきちんと理解し，複雑な問題を記号など用いて簡潔化し問題をすばやく処理する。	正弦定理・余弦定理にとどまらず，その他いろいろな定理を正確に理解しており知識が豊富である。様々な数学記号・用語を理解しており，それらを工夫して使う方法を身に付けている。	三角形の決定条件について再確認する。三角比の意味やその値の求め方の復習をする。

f 「評価の総括」(観点別評価から評定へ)

◎ 「小単元の評価」

小単元 α				
評価の観点	①関心	②見方	③表現	④知識
学習活動1	A	B		
学習活動2		B		A
学習活動3	A	A	B	
学習活動4		B	B	B
総括	6点	9点	4点	5点

- * 例えばAは3点, Bは2点, Cは1点のように点数化する。
- * 1つの小単元の最後には小テストなどを実施し生徒の学力を把握する。
- * 1つの学習活動において4観点すべて評価するのでなく観点を絞って評価することも必要である。



◎ 「小単元の評価」から「学期における評価」

○学期					
評価の観点	①関心	②見方	③表現	④知識	学期における定期考査の得点(観点は②, ③, ④として捉える)
小単元 α	6点	9点	4点	5点	中間考査・・・(オ) 期末考査・・・(カ) (キ) = $\frac{(オ)+(カ)}{2}$
小単元 β	○点	○点	○点	○点	
小単元 γ	×点	×点	×点	×点	
合計	△点	△点	△点	△点	
換算点	(ア)	(イ)	(ウ)	(エ)	

- * 例えば, 4観点における合計をそれぞれ100点満点に換算し, 小単元の評価と学期における定期考査の得点をもとにその学期の評価(点数化)をする。
- * 学期の評価(点数化)の計算例

$$(ア) \times \frac{1}{10} + (イ) \times \frac{1}{10} + (ウ) \times \frac{1}{10} + (エ) \times \frac{1}{10} + (キ) \times \frac{6}{10} = \text{《学期の評価(得点)》}$$



◎ 「学期における評価」から「学年における評価(評定)」

1学期	2学期	3学期	学年	→ → → 評定 5段階
(a)点	(b)点	(c)点	(d)点	

* 例えば (d) = $\frac{(a) + (b) + (c)}{3}$

- * 「小単元の評価」の点数化や, 「小単元の評価」から「学期における評価」, 「学期における評価」から「学年における評価(評定)」の総括の仕方などは, 学校や生徒の実情に応じて各学校で定める。

エ 留意事項

- (ア) 評価方法の中でも、教員による観察は重要な意味を持つものであり、校内研究・研修の在り方を工夫して評価の力量を高めることが求められる。
- (イ) 教科担当者間で評価の結果に目を通すなど、評価について共通理解を図ることが必要である。
- (ウ) 学習者の主観を重視し、興味・関心を示す具体的行動を客観的に測定する方法も取り入れていく必要がある。
- (エ) 小単元の評価においては、4観点すべてに基づく評価が有効とは限らないので、観点を限定するなどの取扱いも必要であるが、単元の評価では4観点すべてに基づく評価となるようにする。

オ その他（参考文献）

高等学校における評価規準，評価方法等の研究開発について（国研）

高等学校学習指導要領解説 数学編・理数編 平成11年12月文部省（実教出版）

教科書 数学Ⅰ（東京書籍）

(5) 理 科

理 科

ア 教科目標 「理科」

自然に対する関心や探究心を高め、観察、実験などを行い、科学的に探究する能力と態度を育てるとともに自然の事物・現象についての理解を深め、科学的な自然観を育成する。

イ 教科の評価の観点及び趣旨

関心・意欲・態度	思考・判断	観察・実験の技能・表現	知識・理解
自然の事物・現象に関心や探究心をもち、意欲的にそれらを探究するとともに、科学的態度を身に付けている。	自然の事物・現象の中に問題を見だし、観察、実験などを行うとともに、事象を実証的、論理的に考えたり、分析的・総合的に考察したりして問題を解決し、事実に基づいて科学的に判断する。	観察、実験の技能を習得するとともに、自然の事物・現象を科学的に探究する方法を身に付け、それらの過程や結果及びそこから導き出した自らの考えを的確に表現する。	観察、実験などを通して自然の事物・現象についての基本的な概念や原理・法則を理解し、知識を身に付けている。

ウ 評価方法の例

(ア) 科目の目標 「理科総合B」

自然の事象・現象に関する観察、実験などを通して、生物とそれを取り巻く環境を中心に、自然の事物・現象について理解させるとともに、人間と自然とのかかわりについて考察させ、自然に対する総合的な見方や考え方を養う。

(イ) 科目の評価の観点及び趣旨

関心・意欲・態度	思考・判断	観察・実験の技能・表現	知識・理解
生物とそれを取り巻く環境を中心に、自然の事物・現象に関心をもち、意欲的にそれらを探究するとともに、自然を総合的にとらえる科学的態度を身に付けている。	生物とそれを取り巻く環境を中心に、自然の事物・現象の中に問題を見だし、観察、実験などを行うとともに、実証的、論理的に考えたり、分析的・総合的に考察したりして問題を解決し、事実に基づいて科学的に判断する。	生物とそれを取り巻く環境にかかわる観察、実験の技能を習得するとともに、それらを科学的に探究する方法を身に付け、それらの過程や結果及びそこから導き出した自らの考えを的確に表現する。	生物とそれを取り巻く環境を中心に、自然の事物・現象について、観察、実験などを行い、それらの基本的な概念や原理・法則を理解し、知識を身に付けている。

(ウ) 単元の目標

大単元 (2) 生命と地球の移り変わり

中単元 イ 生命の移り変わり

小単元 (7) 生物の変遷 における単元の目標を以下に示す。

地球上に生物が誕生してから、陸上に進出し現在の生物に至るまでの進化の過程と変遷を、地球環境と関連付けて考察させ、自然に対する総合的な見方や考え方を養う。

(エ) 単元の評価規準

関心・意欲・態度	思考・判断	観察・実験の技能・表現	知識・理解
生物の多様化が地球環境の移り変わりによって起こったことに関心をもち、意欲的にそれらを探究しようとする。	生物の移り変わりと地球環境の移り変わりを時間的に対比して、その因果関係を考察し、その要因を見いだす。	さまざまな化石標本や顕微鏡による細胞標本の観察の仕方を知り、生物が出現した地質時代の順序性や原核生物と真核生物の違いを図表にして表現する。	原始生命体の誕生から生物が陸上へ進出するまでの道筋を地球環境の変化と関連付けて理解し、知識を身に付けている。

(オ) 観点別評価例

評価に当たっては、生徒の行動観察、ワークシート、レポート、ノート、発表などがあるが、その特徴を理解し、評価する観点に適合したものを選んだり、新たに工夫したりして多角的に評価を行い、評価の信頼性や客観性を高めていくことが必要である。

a 生徒の観察・記録

授業に取り組む姿勢・態度、活動状況、発言内容などを観察することによる。

観察・実験における生徒の興味・関心、注意力や表現力などを観察することは、主に「関心・意欲・態度」や「観察・実験の技能・表現」に関する能力を評価するのに適している。パフォーマンステストによって、実験の技能を観察することも観察方法の一つとして実施するとよい。

b ワークシート（作業ノート）

四つの観点にしたがって設問を設けたワークシートを作成し、その単元に取り組む姿勢や、科学的な思考力・判断力・表現力等を客観的に評価する。この方法は、一律に全員から評価資料として得ることができることや、生徒自身の学習のまとめとしても取り組める。

c 観察・実験、課題研究のレポート

レポートからは科学的で創意に満ちた表現方法をみることができるので、評価情報が多い。「ねらい」や「動機」などに記述される内容からは、「自然の事象を探究しようとする関心や意欲」などを読み取ることができる。また「今後の課題や感

想」などに記述される内容からは、「科学に対する態度」を読み取ることができる。

さらに、表やグラフによる表現の工夫、データ処理の方法などの評価資料も活用できる。ただし、こうした評価を可能にするためには、スキル学習を段階的に行い、レポートの書き方などを全員に指導し徹底しておく必要がある。

d 授業ノート

定期的に提出を求め確認したり、机間巡視の際の観察などにより、学習内容のまとめを評価する。板書を写し取っているだけでなく、生徒自らが調べたことを追加しまとめているか、分かりやすく整理しているかなど、創意工夫に関する側面を評価することができる。

e 自己評価や相互評価

探究活動や課題研究等におけるプレゼンテーションやレポートなどの発表活動について、生徒相互又は自分で評価する。

ワークシートやレポートの中で、評定尺度法、自由記述法、質問紙法などの形式で行うと取り組みやすい。また、この評価を行うことで、生徒自身が学習内容や取り組みに関心をもち学習を深化、発展させたり、到達目標に達していない生徒にとっては、努力を要する観点を自ら確認するという積極的な意味ももつ。

ここでは、理科総合Bにおける、小単元(7)生物の変遷(6時間)の学習指導と評価の実践例を示す。

[指導と評価の計画]

時間	ねらい・学習活動	具体的な評価規準との関連				評価方法等
		関心 意欲 態度	思考 判断	技能 表現	知識 理解	
1 次	○生命の起源から光合成生物の出現までを、地球環境の変化と関連づけて理解できる。					
1	・原始大気成分から有機物が誕生した過程を探究する。 ・原始生命体が誕生した後、さまざまな合成系ができていった過程を、地球環境と関連付けて推定する。		イ 1			ワークシート 1
2	・どのように細胞進化が進んでいったのか、現存の単細胞生物の構造を観察して推定する。 《実験 1》細胞構造の観察	a 1 A 1		c 1 C 1		実験ノート 1 行動観察

2	○生物の陸上進出を，地球環境の変化と関連付けて理解できる。					
3	・植物が陸生化するのに伴って獲得した構造について，調べる。 ～ワークシート2（事前に配布・回収）で生徒から出た意見をもとに，実験2を展開する～ 《実験2》植物の陸上進出 ～維管束の観察～	ア1 A2	イ2	ウ1 C2		《参考資料》 ワークシート2 実験ノート2 行動観察
4	・動物が陸生化するのに伴って獲得した構造について，調べる。 《実験3》動物の陸上進出 ～呼吸器官の観察～	a3 A3		c3 C3		〔前時間に配布・回収〕 実験ノート3 行動観察
3	○生物の多様化や変遷を，地球環境の変化と関連付けて理解できる。					
5	・生物の繁栄と絶滅などの生物の変遷を，地球環境の変化と関連付けて考察する。 ・霊長類が，樹上生活で得た体の特徴を推定する。	ア2	イ3			ワークシート3
6	・二足歩行によって，どのように体の構造が変化していったかを推定する。	ア3	イ4			ワークシート4
	・単元の内容確認を行う。	※3	※1		※2	単元の確認小テスト 授業ノート提出

《参考資料》

「理科総合B」ワークシート2

植物の陸上進出

テーマ 植物が陸上で生活するために，体の構造がどのように変わっていったのだろうか？

1 上記のテーマについて，自分で考えたことを書いてみよう！～

※ 意欲的にテーマを探究しようとしているか。… ア1

2 1の内容を証明するために，どのような植物を観察，比較するとよいか？

※ 1で答えた内容に準じて，科学的に思考・判断して論じているか。… イ2

3 植物の組織を観察するために、必要な器具を挙げてみよう。

※ 器具名を正しく表記できるか。… ウ1

「理科総合B」実験ノート2

植物の陸上進出

テーマ 植物が陸上で生活するために維管束が進化したのだろうか？

1 維管束が観察されるのは、次のどの植物だろうか？ ○をつけよう。

- a アオサ（藻類） b スギゴケ（コケ植物） c ベニシダ（シダ植物）
d イチョウ（裸子植物） e ホウセンカ（被子植物）

※ 基本的な植物についての知識を身に付けているか。… d1

2 次の植物の茎の切片標本を作り、維管束の有無を観察してみよう！

- (1) 観察材料： スギゴケ、ホウセンカ
(2) 実験器具： 光学顕微鏡、かみそり、スライドガラス、カバーガラス、シャーレ、ピンセット

3 標本の作り方

- (1) スギゴケとホウセンカの茎をかみそりで薄く切り、水をはったシャーレの中に入れる。
(2) 薄く切れた切片を選んで、ピンセットでスライドガラスに置き、気泡が入らないよう、静かにカバーガラスをかける。
(3) 顕微鏡で観察する。

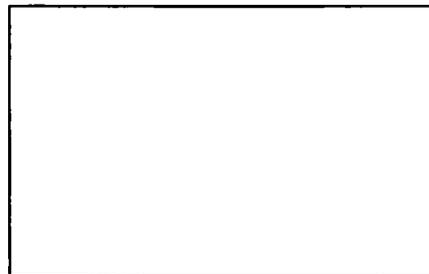
4 観察結果

(1) スギゴケ、ホウセンカの茎の断面のスケッチをしよう。

また、名称を矢印で図の中にかきこもう。

※ スケッチは正確に描けているか。
名称を記入しているか。
… c2

道管
篩管
維管束
形成層



(2) 考 察 ～観察結果からどのようなことがいえるか、考えてみよう。～

※ 観察結果に基づいて、科学的に考察しているか。… b1
観察結果から導き出した自らの考えを的確に表現しているか。… b1

(3) 感想

～自分の取組みをふりかえってみよう。

また、不思議に思ったことや、その疑問について説明するためには、どのような実験や観察を行ったらよいか、自由に書いてみよう。～

※ 《自己評価》意欲的に取り組んでいるか。… a 2
 自然界の現象に問題を見だし、論理的に考えようとしているか。… b 1
 科学的に探究する方法を身に付けているか。… c 2

※ 《行動観察》積極的にスケッチをしようとしているか。… A 2

観察操作を正しく行っているか。… C 2

(カ) 評価の総括

a 単元での総括

ある程度まとまった単元が終了した時点で評価を行い、継続的に指導と評価の一体化を進めることが必要になる。単元ごとに四つの項目における評価項目をつくり、重点的に評価する項目を決めておくと無理が生じない。

次に示した事例は、上記の各評価資料におけるワークシート、実験ノート、行動観察、授業ノートなどの各点数を、十分満足できる：3点，おおむね満足できる：2点，努力を要する：1点とし、3段階で点数化した。

また、単元終了後の小テストは、「思考・理解」「知識・理解」を評価する質問項目を各10点満点で出題し、採点した。

[単元での評価の総括 (例)]

	関・意・態	思考	技能・表現	知識・理解
評価資料	ア, a, A	イ, b, B	ウ, c, C	エ, d, D
ワークシート 1	—	3点	—	—
ワークシート 2	3点	3点	2点	—
ワークシート 3	2点	2点	—	—
ワークシート 4	3点	3点	—	—
実験ノート 1	3点	—	3点	—
実験ノート 2	3点	3点	2点	3点
実験ノート 3	2点	—	3点	—
行動観察	2点	—	3点	—
小テスト (各10点満点) ※	—	8点	—	6点
授業ノート (3点満点) ※	2点	—	—	—
合計 (Aさんの評価)	20点	22点	13点	9点
合計 (満点)	24点	25点	15点	13点
到達度 (%)	83%	88%	87%	69%
総括	A	A	A	B

※到達度から各観点の総括を行う基準 (例)

80%以上	の到達度	: A
50%以上80%未満	の到達度	: B
50%未満	の到達度	: C

b 学期末における総括

中単元「第2編 生命の移り変わり」の中の小単元には、以下の二つの単元がある。

1 学期中間考査以降期末考査まで、二つの単元を学習する過程で次のような評価を行う。さらに、期末考査でペーパーテストを実施し、それらの評価を総括して期末の評価を出す。

第1章 生物の変遷と多様性 (6時間)

評価の具体的な方法は上記(カ) aの例のように行うが、この単元では4観点のすべてを評価した。

第2章 遺伝の規則性 (5時間)

この章は、観察・実験より、演習や小テストによる確認が主になるので、「技能・表現」の項目の評価は出さず、他の3観点を評価した。

{ 学期末における評価の総括 }

評価の時期		関・意・態	思考	技能・表現	知識・理解	合計
事中 評価	第1章	A (6点) 最高(6点)	A (6点) 最高(6点)	A (3点) 最高(3点)	B (2点) 最高(3点)	17点 最高(18点)
	第2章	B (4点) 最高(6点)	A (6点) 最高(6点)	—	A (3点) 最高(3点)	13点 最高(15点)
事後 評価	ペーパー テスト	—	25点 最高(30点)	14点 最高(20点)	36点 最高(50点)	75点 最高(100点)
最 高 点		12点	42点	23点	56点	133点
Aさんの得点		10点	37点	17点	41点	105点

単元ごとの、評価を点数化するときには各単元の学習のねらいや内容などに応じて、比率を適切に定める必要がある。

上記の例の場合、第1章は各4観点をそれぞれ最高6～3点に、第2章は各3観点をそれぞれ最高6～3点に換算して合計を算出した。さらに、期末考査におけるペーパーテストで、「思考」「技能・表現」「知識・理解」を問う問題をそれぞれ上記の比率で出題し、事中評価と事後評価をそれぞれ合計すると、

Aさんの到達度 … $(105/133) \times 100 = 78\%$ となる。

この例では、事中評価：事後評価＝33：100にしているが、各学校で学習する重点項目や生徒の実態を踏まえ、適切な方法や割合を定める。

(キ) 評定への総括

学期末や学年末においては、平均到達度を各学校で設定した基準に当てはめて、評定を行う。

[学期末や学年末における評定への総括の具体例]

	最高点 (X)	Aさんの得点 (Y)	$Y/X \times 100$	評 定
中間考査まで	140点	121点	86%	
期末考査まで	133点	105点	78%	
1学期末	273点	226点	82%	4

Aさんの場合、学期末の到達度が82%なので、次に示すような〔到達度から各観点の総括を行う基準(例)〕によって、4とした。

90%以上の到達度	: 5
80%以上90%未満の到達度	: 4
50%以上80%未満の到達度	: 3
20%以上50%未満の到達度	: 2

(ク) 目標に到達しなかった生徒への手だて

目標に到達せず努力を要するとされた生徒には、その原因を教師と一緒に考えることでつまづきを把握させることが必要である。

具体的には、ワークシートや実験レポートの中で、学習の成果を自ら気付かせるための「自己評価」を行わせるなど、生徒自身が自ら学ぶ意欲を向上させる指導が必要になる。

また、理科では、学習過程に計算や化学式などを含む単元も多く、そのため生徒の理解度に差が出やすい。小単元終了ごとに小テストを実施して、目標に到達していない生徒へは、放課後などの時間に個別指導を行うことで早めに手だてを行いたい。

さらに、知的好奇心を刺激したり、達成感を感じさせたりすることのできる教材、例えば、

- ・これまで身に付けてきた否定的な学習観・理科観を変えるもの
- ・生徒たちの日常生活に根ざした、現実味のあるもの
- ・ゲーム性などがあり、生徒だけでなく教師も楽しめるもの
- ・予備知識や計算力が不足していても、授業に参加できるもの
- ・高校生であるという気持ちを認識できる(劣等感を感じさせない)新鮮さと意外性のあるもの

など、様々な教材を工夫することで、理科に対して苦手意識をもつ生徒の学習意欲を引き出したい。

エ 留意事項

- (ア) 評価をする場合、教科担当者の主観が恣意的にならないように、担当者間で評定結果を十分に検討する必要がある。
- (イ) 生徒が主体的に学習に取り組めるよう、生徒には前もって学習内容や評価規準を十分に説明しておく必要がある。
- (ウ) 評価を行った後、その結果を基に指導方法を改善して初めて、学習評価を行ったとすることができる。指導に生かす評価の充実(指導と評価の一体化)を図るため、生徒の学習の評価とともに、教師の指導の評価を行い、評価規準や指導方法の継続的な見直しを教員間で連携を取りながら行う必要がある。
- (エ) 評価資料を作成するために、肝心の授業を犠牲にするという現実も予想される。評価が教員にとって過大な負担とならないように、評価規準を作成する際、学校内又は教科内での創意工夫や検討が必要になる。
- (オ) 苦勞して作成した評価表や目標が、授業の中で実際に役立たないのではないかと、意見を聞く。評価規準づくり自体が目的化される心配もある。評価のための評価とならないよう、「なぜ、評価を行うのか。」という原点に帰ることが必要である。「この生徒はこの単元ではAかBか。」ということ判断するために評価規準をつくるのではなく、生徒一人一人の確かな学力を高めるために、「今必要なBはこれなのだ。」という確認をするために、評価規準をつくる。そして、その規準をつくることによって、単元の内容を関連付けたり見通しを立てたりして、指導に生かすことが可能になる。

オ その他

(ア) 参考文献

- ・ 高等学校新学習指導要領の解説 (学事出版)
- ・ 月刊高等教育 特集「学力問題を考える」(学事出版2002年12月)
- ・ 評価規準と評価基準表を使った授業実践の方法 (黎明書房)

(6) 外国語

外国語

ア 教科目標

外国語を通じて、言語や文化に対する理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、情報や相手の意向などを理解したり自分の考えなどを表現したりする実践的コミュニケーション能力を養う。

イ 教科の評価の観点及び趣旨

観 点	趣 旨
(1) 関心・意欲 態度	コミュニケーションに関心をもち、積極的に言語活動を行い、コミュニケーションを図ろうとする。
(2) 表現の能力	外国語を用いて、情報や考えなど伝えたいことを話したり、書いたりして表現する。
(3) 理解の能力	外国語を聞いたり、読んだりして、情報や話し手や書き手の意向など相手が伝えようとすることを理解する。
(4) 知識・理解	外国語の学習を通して、言語やその運用についての知識を身に付けるとともにその背景にある文化などを理解している。

ウ 評価方法の例

(ア) 評価計画の立案

a 教材の名称 英語 I All Aboard ! English I Lesson8 Coins of the World

b 本課の指導目標

- ・世界各国のコインに記された、その国特有なデザインが表す歴史的・文化的背景について考える。
- ・間違いを恐れず英語で積極的に話す。
- ・関係代名詞を使用した表現ができるようになる。

c 本課の指導計画

第1次 イントロダクション

世界のコインについて (インターネットより)

第2次 ニュージーランドとアメリカのコインについて (1)

第3次 ニュージーランドとアメリカのコインについて (2)

第4次 ユーロコインのおもしろさについて

第5次 将来の世界共通コインについて、エクササイズ (1)

第6次 エクササイズ (2)、小テスト

d 本時の評価規準の具体例と評価方法例

※指導方法や評価項目に従って、以下の評価規準から取捨選択する。

観点 言語活動	関心・意欲 態度	表現の能力	理解の能力	知識・理解	
聞くこと	<p>【言語への取組】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・うなづいたり、メモをとるなど題材内容に関心を示している。 <p>○ 観察法</p> <p>【コミュニケーションの継続】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・理解できないところがあっても推測するなどして聞き続けている。 <p>○ リスニングテスト</p>	<p>【正確な聞き取り】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・聞いた内容について正しく聞き取ることができる。 <p>【適切な聞き取り】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・話された質問や読まれたりした内容を聞き取ることができる。 <p>○ リスニングテスト</p>	<p>【言語についての知識】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・関係代名詞 (which) を使った英文の基本的な知識を身につけている。 <p>【文化についての理解】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・各国の硬貨の図柄には文化的な意味があることを理解する。 <p>○ ワークシート</p>	<p>【言語活動への取組】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・間違いを恐れずに英語で積極的に話している。 ・聞き手の興味が増すように実際に硬貨を見せたり、ジェスチャーを用いて、工夫をしている。 <p>【コミュニケーションの継続】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・つなぎ言葉を使ったり言い換えたりするなどして、不自然な沈黙をせずに話し続けている。 <p>○ スピーチ</p>	<p>【言語についての知識】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・関係代名詞を含んだ英文を使って話そうとしている。 <p>【文化についての理解】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・硬貨の図柄の持つ文化的意味を理解し、それについて話そうとしている <p>○ ショートスピーチ</p>

<p>読むこと</p>	<p>【言語活動への取組】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・興味・関心を持ち、内容を理解しようと意欲的に読んでいる。 ・要点にアンダーラインを引くなどの工夫をしながら取り組んでいる。 <p>【コミュニケーションの継続】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・意味のわからない単語や表現に対して、意味を推測したり辞書を使って最後まで読み進めようとしている。 <p>○ 音 読</p>	<p>【正確な音読】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・正確な発音や適切なイントネーションで本文を音読できる。 Coins have various pictures, such as animals, plants, people, or buildings. ・内容が伝わるように、工夫して音読ができる。 <p>【適切な音読】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・聞き手に本文の内容を伝えられるように、場面に合った適切な表現方法を工夫して音読することができる。 <p>○ 音 読</p>	<p>【正確な読み取り】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ニュージーランドの硬貨には国鳥であるキーウィが記されていること、アメリカの硬貨に記されていた元大統領が新しいドル硬貨では先住民の親子に変わったことを理解している。 <p>【適切な読み取り】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・世界の硬貨の図柄には各国を代表する動物・植物・人・建物などが記されていることを理解している。 ・硬貨の図柄は時代によって変わることを理解している。 <p>○ 小テスト</p>	<p>【言語についての理解】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・単語の意味や文の構造を理解している。 such as 構文 <p>【文化についての理解】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・硬貨の図柄はその国の文化が深く関係していることを理解している。 <p>○ 小テスト</p>
<p>書くこと</p>	<p>【言語活動への取組】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・読みやすい字で書いていたり意欲的に書き直したりしている。 <p>【コミュニケーションの継続】</p>	<p>【正確な筆記】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・文法に従って、正しく書くことができる。 ・書こうとすることを読み手に正確に伝えることができる。 		<p>【言語についての理解】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・関係代名詞を含む英文の構造を理解した上で、正しい英文が書ける。 ・自分の意見を伝えるための適

	<ul style="list-style-type: none"> ・表現できないところがあっても既習の語句や表現を用いたり辞書で調べた新たな表現を使ったりしながら書き続けるなどの工夫をしている。 ○ ワークシート 	<p>【適切な筆記】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・文のつながりや構成を考えた文章を書くことができる。 ・内容を整理し必要な分量を書くことができる。 ○ 英作文 	/	<ul style="list-style-type: none"> 切な表現を知っている。 【文化についての理解】 ・世界の硬貨には自国の文化的な図柄が出ていることを理解している。 ○ワークシート
--	--	--	---	---

(イ) 評価の方法

a 関心・意欲・態度

- ・ノート記録
- ・インタビュー
- ・発表の様子、コミュニケーション活動への取り組み状況などの観察（観察記録）
- ・コミュニケーション活動に用いたワークシート
- ・コミュニケーション活動への取り組みに関する生徒の自己評価
- ・質問紙（アンケート）

b 表現の能力

- ・スピーチ、プレゼンテーション
- ・作品、制作品
- ・ノートのまとめ方、発表の様子や授業や活動への取り組み状況の観察
- ・授業中のコミュニケーション活動における生徒の話す力の観察
- ・インタビュー
- ・定期試験における英作文テスト

c 理解の能力

- ・ノートのまとめ方、発表の様子や学習プリントの記述状況の観察
- ・授業中における生徒の聞く力の観察
- ・リスニングテスト
- ・定期テストなどにおける英文読解問題
- ・理解度を試すワークシート

d 知識・理解

- ・レポート法
- ・ノートのまとめ方、発表の様子や学習プリントの記述状況の観察
- ・コミュニケーション活動における生徒の活動状況の観察
- ・コミュニケーション活動に用いたワークシート
- ・授業中に読んだ英文についての感想文や英作文などの作品
- ・定期試験などのペーパーテスト

(ウ) 観点別評価例

a 観点別評価（以下のA, B, Cの3段階で評価することとする）

A: 十分満足できると判断されるもの

B: おおむね満足できると判断されるもの

C: 努力を要すると判断されるもの

b 観点別評価の実際

(a) スピーチやプレゼンテーション的な活動の評価（活動の観察による例）

・次のような評価カードを準備し、生徒の発表を観察しながら評価を記入する。

<発表評価カード>	発表者氏名 ()
1 間違いを恐れず、伝えようとしている。	→ [A B C]
2 適切な速さや声の大きさを発表している。	→ [A B C]
3 話そうとしたことを正確に伝えることができる。	→ [A B C]
4 コメント []

・評価規準ごとの得点を補助簿に記録し、最終的な評価の資料とする。

・同様のカードを<相互評価カード>として他生徒にも記入させ、生徒が相互に評価した結果を、教師による評価の参考にすることもできる。（相互評価）

・評価カードを生徒に返却し、その後の指導に生かす。

(b) ペアでの会話やグループでのディスカッションなど、インタラクティブな活動の評価（自己評価による例）

・次のような自己評価カードを生徒に配布し、活動の後に、それについて評価を記入させる。

<自己評価カード>	記入者氏名 ()
1 相手の話を真剣に聞こうとしたか。	→ [A B C]
2 授業で学んだ表現を使うことができたか。	→ [A B C]
3 ペアやグループで協力し合って取り組めたか。	→ [A B C]
4 感想・反省 []

(c) リーディングテストによる評価の例

<発表評価カード>	発表者氏名 ()
1 英文を意欲的に読もうとしている。	→ [A B C]
2 適切な音量で相手に伝えようとしている。	→ [A B C]
3 リズム・イントネーション・発音の知識がある。	→ [A B C]
4 コメント []

(エ) 単元での観点別評価の総括

単元の 評価観点	関心・意欲・態度				表現能力				理解能力				知識・理解				
	評価項目 1	評価項目 2	..	評価 値													
番号 氏名	1	2	..	評価													
1	****	A	C	..	B	B	C	..	B	A	A	..	A	A	B	..	A
2																	
3																	

○各観点のA～Cをまとめ、観点別評価を決定する。

- ・ 1回ずつの評価をA～Cでつける。
- ・ A=3点, B=2点, C=1点として点数化する。
- ・ 点数を評価の回数で割り、得点率を計算し評価を出す。

例) ある生徒の「関心・意欲・態度」における観点で、5個の評価項目において次のように評価された場合

評価項目 1	評価項目 2	評価項目 3	評価項目 4	評価項目 5
A	C	B	A	B

・ 計算式 総得点÷評価項目数

$$(3+1+2+3+2) \div 5 = 2.2$$

○次の平均得点率から、その観点の評価を決定する。

2.5以上 → A	1.5 ~ 2.5未満 → B	1.5未満 → C
-----------	-----------------	-----------

従って、この生徒の単元における観点別評価はBとなる。

(オ) 単元毎の観点別評価を評定に総括する方法

【例1】 観点別評価の結果をA, B, Cで表し、それらを評価資料とする方法

<観点別評価の組み合わせを規準に当てはめて評定を行う例>

	1学期				2学期					3学期				学年 観評 点価 別
	単元 1	単元 2	単元 3	単元 4	単元 5	単元 6	単元 7	単元 8	単元 9	単元 10	単元 11	単元 12	単元 13	
関心・意欲・態度	B	A	B	A	B	A	A	B	B	A	B	A	A	→ A
表現能力	C	B	B	B	A	B	A	C	B	C	C	B	A	→ B
理解能力	C	B	B	C	B	B	B	C	B	C	C	C	B	→ B
知識・理解	A	A	B	C	A	A	B	A	A	B	B	A	A	→ A

↓

学年末評定
4

a 学年末における観点ごとの評価の総括

○総括方法は、単元における評価の総括と同じ計算式と規準で行う。

例) 上記一覧表における「関心・意欲・態度」の学年末評価

- ・ A=3点, B=2点, C=1点として点数化する。
- ・ 計算式 獲得点数÷単元の数

$$(2 + 3 + 2 + 3 + 2 + 3 + 3 + 2 + 2 + 3 + 2 + 3 + 3) \div 13 = 2.53$$

従って、この生徒の「関心・意欲・態度」における観点別評価はAとなる。

b 学年末の観点別評価から評定への総括

- ・ Aは3点, Bは2点, Cは1点
- ・ 合計した点数を下記の評定の基準例に当てはめて評定を行う。

【評定の基準例】

観点別学習状況の評価の具体例				合計点	評定
A	A	A	A	12	5
A	A	A	B	11	
A	A	B	B	10	4
A	A	A	C		3
A	B	B	B	9	
A	A	B	C		
B	B	B	B	8	
A	B	B	C		
A	A	C	C		
B	B	B	C	7	2
A	B	C	C		
B	B	C	C	6	
A	C	C	C		1
B	C	C	C	5	
C	C	C	C	4	

◇評定の出し方の例

観点別評価	関心・意欲・態度	表現の能力	理解の能力	知識・理解
換算値	A	B	B	A
評定	3 + 2 + 2 + 3 = 10・・・評定「4」			

【例2】 観点別評価の結果を点数で表し、それらを評価資料とする方法
 <各観点ごとに達成値を求め、その平均値を規準に当てはめて評定を行う例>

a 学年末における観点ごとの評価の総括

- ①各観点ごとに、すべての評価項目の点数を合計する。
- ②その合計値の満点に対する割合(%)を求める。(それを達成値とする。)
- ③各観点の達成値(小数第二位を四捨五入)を合計する。
- ④その合計値を観点の数で割り、各観点の平均値(少数第一位を四捨五入)を求める。
- ⑤平均値を、あらかじめ設定した基準に当てはめて判定する。

	関心・意欲・態度	表現の能力	理解の能力	知識・理解
点数合計	157点 / 200点満点	232点 / 280点満点	198点 / 250点満点	172点 / 200点満点
観点別評価	B	A	B	A

◇観点別評価規準

- 80%以上 の達成値：「十分満足できる」 → A
 50%以上80%未満の達成値：「おおむね満足できる」 → B
 50%未満 の達成値：「努力を要する」 → C

b 学年末の観点別評価から評定への総括

観点ごとの達成値	78.5% (B)	82.9% (A)	79.2% (B)	86.0% (A)
評定	①78.5+82.5+79.2+86.0=326.6 ②326.6÷4=81.7→82 ③82→「4」			

- ①各観点の達成値（小数第2位を四捨五入）を合計し、合計値を求める。
 ②合計値を観点の数で割り、各観点の平均達成値（小数第一位を四捨五入）を求める。
 ③平均達成値を、あらかじめ設定した下表のような規準に当てはめて評定を行う。

◇評定の基準

90%以上の達成値	: 5
80%以上90%未満の達成値	: 4
50%以上80%未満の達成値	: 3
20%以上50%未満の達成値	: 2
20%未満の達成値	: 1

※ %の数値は仮のものであり
 実際の評定の基準は各学校
 で設定する。

◇達成値の設定

上記例においては、評定基準のための達成値の設定は、観点別学習の評価で用いた達成値との整合性を考慮して、下表のように設定してある。

観 点 別 評 価		評 定	
80% →	十分満足できる	A	特に高い程度のもの 5 ← 90%
			十分満足できる 4 ← 80%
50% →	おおむね満足できる	B	おおむね満足できる 3 ← 50%
		C	努力を要する 2 ← 20%
	一層努力を要する 1		

※【例1】【例2】いずれの評定算出法にしても、定期試験などのペーパーテスト（事後指導）との比率は各学校で考える。

エ 留意事項

- (ア) ペーパーテストの作成にあたっては4つの評価の観点を念頭に置く。
- (イ) 自己評価や相互評価の記録を、最終的な評価に加味することについては、慎重に行う必要がある。
- (ウ) 単一の時期や単一の方法によってのみ評価するのではなく、評価の目的に応じて適切な方法を工夫する。
- (エ) ゆとりある評価活動を続けるために、一単位時間の評価の観点を絞り込んだり、ある観点の評価に重点化（重み付け）することも考える。
- (オ) 個人カルテ、評価記録簿、補助簿などを作り、生徒一人ひとりの細かな観察ができるよう工夫する。
- (カ) 評定の出し方には
 - a 各単元ごとの評価を累積して学年末に評価を出し、学年末の評定に総括する方法
 - b 各学期の評価から学年末の評価を出し、学年末の評定に総括する方法
 - c 各学期の評定を学年末の評定に総括する方法が考えられるが、各学校の実態に応じた方法を選択してよい。
- (キ) 授業の節目での評価は、授業のあり方を考える基にもなり、評価を次の授業に生かす「指導と評価の一体化」に通じるものである。
- (ク) 平常授業における観点別評価（事中評価）と定期テスト（事後評価）は分けて考えその比率は学校の実態に応じて行う。
- (ケ) 目標に到達せず努力を要するとされた生徒については、観点別に遅れている部分を生徒に知らせ、長期休業中や放課後の時間を利用して個別指導を行う。その他、生徒の実態に応じた工夫ある指導をとおして、到達できなかった部分を補充し、生徒の学ぶ意欲が高まるよう支援を続ける。

オ その他

◇ 参考文献

- ・「高等学校学習指導要領解説 外国語編・英語編」（平成11年12月 文部省）
- ・「評価のあり方についての教育課程審議会答申」（平成12年12月）
- ・「改訂 高等学校学習指導要領の展開 外国語（英語）科編」（平成12年7月 明治図書）
- ・「高校改訂指導要録の解説と記入例」8 外国語（平成13年12月 明治図書）
- ・「評価基準、評価方法等の研究開発について」（平成14年2月 国立教育政策研究所教育課程研究センター）

(7) 工業

工業

ア 教科目標

工業の各分野に関する基礎的・基本的な知識と技術を習得させ、現代社会における工業の意義や役割を理解させるとともに、環境に配慮しつつ、工業技術の諸問題を主体的、合理的に解決し、社会の発展を図る創造的な能力と実践的な態度を育てる。

イ 教科の評価の観点及び趣旨

観 点	趣 旨
①関心・意欲・態度	工業技術に関する諸問題について関心をもち、その改善・向上を目指して意欲的に取り組むとともに、創造的、実践的な態度を身に付けている。
②思考・判断	工業技術に関する諸問題の解決を目指して自ら思考を深め、基礎的・基本的な知識と技術を活用して適切に判断し、創意工夫する能力を身に付けている。
③技能・表現	工業の各分野に関する基礎的・基本的な技術を身に付け、環境に配慮し、実際の仕事を合理的に計画し、適切に処理するとともにその成果を的確に表現する。
④知識・理解	工業の各分野に関する基礎的・基本的な知識を身に付け、現代社会における工業の意義や役割を理解している。

ウ 評価方法の例

教科の基礎的科目であり、各科において共通的な基礎科目である「情報技術基礎」の評価方法の例を示す。

(ア) 科目「情報技術基礎」の目標

社会における情報化の進展と情報の意義や役割を理解させるとともに、情報技術に関する基礎的な知識と技術を習得させ、情報及び情報手段を活用する能力と態度を育てる。

(イ) 科目の評価の観点の趣旨

観 点	評 価 規 準
①関心・意欲・態度	情報及び情報手段の活用について関心をもち、その意義や役割の理解及び諸問題の探求を目指して主体的に学習に取り組むとともに、情報化社会における望ましい心構えや実践的な態度を身に付けている。
②思考・判断	情報及び情報手段の活用に関する諸問題を的確に把握し、自ら思考を深めるとともに情報技術に関する基礎的・基本的な知

	識と技術を活用して適切に判断し、創意工夫をする能力を身に付けている。
③技能・表現	情報及び情報手段の活用するための基礎的な技術と態度を身に付け、情報化社会において情報及び情報手段を適切に活用するとともに、その成果を的確に表現する。
④知識・理解	情報技術に関する基礎的・基本的な知識と技術を身に付け、情報化の進展と情報の意義や役割を理解している。

(ウ) 単元の目標

<単元名>

「産業社会と情報技術」

「情報化の進展と産業社会」(3時間)

<単元の目標>

工業技術者として習得すべき高度情報通信社会における産業社会と情報技術に関する基礎的な知識を身に付けるとともに、情報技術が及ぼす産業社会や日常生活への影響や情報化社会の問題点について理解させ、情報及び情報手段を活用する能力と態度を育てる。

(エ) 評価規準(おおむね満足できると判断されるもの)

	① 関心・意欲・態度	② 思考・判断	③ 技能・表現	④ 知識・理解
	産業社会と情報技術とのかかわりについて関心を持ち、情報技術の進展が産業社会に及ぼす影響や情報に関するモラルの取扱いについて主体的に取り組み、情報化社会における工業技術者としての望ましい心構えや態度を身に付けている。	情報技術が及ぼす諸問題の解決や情報に関するモラルの向上を目指して主体的、かつ客観的に考察するとともに、基礎的な知識と技術を活用して適切に判断している。	情報技術の進展が及ぼす諸問題や情報に関するモラルの向上についての基礎的な知識を身に付け、客観的に把握して適切に処理できるとともに、その成果を的確に表現する。	情報技術が及ぼす諸問題や情報に関するモラルの向上に関する基礎的な知識を身に付け、情報化の進展が及ぼす影響やモラルと管理の在り方について理解している。
	情報技術の進展が産業社会や日常生活に与える影響や情報化社会の問題点について自らすすんで調べたり	情報技術の進展が産業社会や日常生活に与える影響や情報化社会の問題点について様々な角度から考察し	情報技術の進展が産業社会や日常生活に与える影響や情報化社会の問題点について様々な資料を活用して	情報技術の進展が産業社会や日常生活に与える影響や情報化社会の問題点について基礎的・基本的な知識や

	まとめたりしようとする。	ようとする。	客観的に把握し、具体的に説明できる。	その対策を理解している。
	a) コンピュータの発展過程や利用形態について関心を持ち、調べたりまとめたりしようとする。	a) コンピュータの発展過程や利用形態について考察しようとする。	a) コンピュータの発展過程や利用形態について、様々な資料を活用し、具体的に説明できる。	a) コンピュータの発展過程や利用形態について、基礎的・基本的な知識を理解している。
	b) 情報技術の進展とともに産業社会や日常生活における新たな問題点や影響について、調べたりまとめたりしようとする。	b) 情報技術の進展とともに産業社会や日常生活における新たな問題点や影響について考察しようとする。	b) 情報技術の進展とともに産業社会や日常生活における新たな問題点や影響について把握し、具体的に説明できる。	b) 情報技術の進展とともに産業社会や日常生活における新たな問題点や影響について、基礎的・基本的な知識を理解している。

(オ) 観点別評価例

評価にあたっては次のような例があるが、それぞれの特徴を理解した上で、適切な方法をとる必要がある。

- ・観 察：授業等での生徒の取り組む姿勢や態度、活動状況や発言内容等を観察する。
- ・作 品：製作過程、完成品を評価する。
- ・ノ ー ト：授業中の板書やまとめた内容を評価する。また、学習内容によってはレポートの形式や作品を提出させることもできる。
- ・ワグメント：設問形式のワークシートにより、学習のまとめなどにも利用する。
- ・テ ス ト：ペーパーテストや実技テストなどがある。

時間	ねらい・学習活動	単元の評価規準との関連	評価方法
1	○ねらい	①の a)	・観 察
2	・ コンピュータの歴史や特徴及びコンピュータの利用形態について理解させ、これからのコンピュータの利用形態などについても考える。 ・ コンピュータが発展していった過程と特徴について調べる。 ・ コンピュータの利用形態について具体的な例を挙げて調べる。 ・ コンピュータの特徴についてコンピュータの発展過程や利用形態を	②の a) ③の a) ④の a)	(行動・発言) ・ノート ・ワークシート ・テスト (パ・パ)

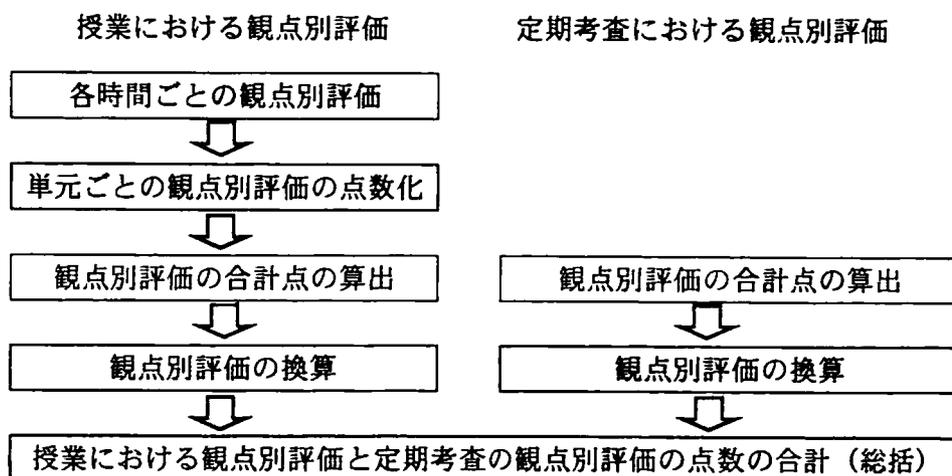
	<p>考慮しながら調べたことを発表する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・コンピュータの特徴について理解をしており、その最適な利用方法について考察する。 		
3	<p>○ねらい</p> <p>情報技術が産業社会や日常生活における新たな問題点や影響について身近な事例を通して理解するとともに表現する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・コンピュータの発展に伴い個人の生活や社会の構造の変化を考える。 ・コンピュータの発展に伴う環境の変化を光と影の部分を取り上げて調べる。 ・様々な分野にコンピュータが導入されたことに伴う光と影の部分の影響を取り上げ、その対応策について調べたことを発表する。 ・コンピュータの発展に伴う影の部分の影響についてその対応策について理解する。 	<p>①のb)</p> <p>②のb)</p> <p>③のb)</p> <p>④のb)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・観察 (行動・発言) ・ノート ・ワークシート ・テスト (A・B・C)

・努力を要すると判断された場合の手立て

① 関心・意欲・態度	② 思考・判断	③ 技能・表現	④ 知識・理解
<p>a) コンピュータ(電卓)を使うことによって便利になった例を挙げさせる。</p> <p>b) 身近なところで情報技術(コンピュータ)が使われているものを挙げさせる。</p>	<p>a) コンピュータ(電卓)を使う以前はどのような方法を行っていたかを考えさせる。</p> <p>b) 情報技術(コンピュータ)が使われているもで、その技術を使う前に比べて便利になった点や、逆に不便になった点を考えさせる。</p>	<p>a) コンピュータ(電卓)を使う以前と以後での違いをまとめ、お互いに発表させる。</p> <p>b) 情報技術(コンピュータ)を使う前に比べて便利になった点や、逆に不便になった点についてまとめ、お互いに発表させる。</p>	<p>a) コンピュータが得意な分野や不得意な分野について他の人の意見も参考にしながらまとめさせる。</p> <p>b) 便利になった点や、逆に不便になった点について他の人の意見も参考にしながらまとめさせる。</p>

(カ) 評価の総括

◇ 評価の総括の手順



◇ 具体的な例

(1-1) 各時間ごとの観点別評価 (A~Cの3段階)

* 時間によっては評価できない観点もあり得る。

観点別学習状況の評価規準

A	十分満足できると判断されるもの
B	おおむね満足できると判断されるもの
C	努力を要すると判断されるもの

單元	時間	関心・意欲・態度	思考・判断	技能・表現	知識・理解
I	1	A	—	—	B
	2	A	B	B	—
	3	B	A	C	B

(1-2) 單元ごとの観点別評価の点数化

* 例えばAを3点, Bを2点, Cを1点のように点数化する。()内は満点

單元	関心・意欲・態度	思考・判断	技能・表現	知識・理解
I	8点 (9点)	5点 (6点)	3点 (6点)	4点 (6点)

(1-3) 観点別評価の合計点の算出

單元	関心・意欲・態度	思考・判断	技能・表現	知識・理解
I	8点 (9点)	5点 (6点)	3点 (6点)	4点 (6点)
II	7点 (9点)	5点 (6点)	5点 (6点)	6点 (9点)
合計点	15点 (18点)	10点 (12点)	8点 (12点)	10点 (15点)

(1-4) 観点別評価の換算

* 例えば授業における観点別評価の点数を40点満点 (定期考査の点数を60点満点) とし, それぞれの観点の換算点を以下のようにして算出する。

○関心・意欲・態度

$$15 \times \frac{40}{(18+12+12+15)} = 10.5 \text{ 点}$$

○思考・判断

$$10 \times \frac{40}{(18+12+12+15)} = 7.0 \text{ 点}$$

○技能・表現

$$8 \times \frac{40}{(18+12+12+15)} = 5.6 \text{ 点}$$

○関心・意欲・態度

$$10 \times \frac{40}{(18+12+12+15)} = 7.0 \text{ 点}$$

単元	関心・意欲・態度	思考・判断	技能・表現	知識・理解
換算点	10.5点(12.7点)	7.0点(8.4点)	5.6点(8.4点)	7.0点(10.5点)

(2-1) 定期考査の得点の観点別評価の合計点の算出

* 例えば中間考査の観点別の配点を思考・判断を20点、技能・表現を30点、知識・理解を50点とする。

考査等名	関心・意欲・態度	思考・判断	技能・表現	知識・理解
中間考査	—————	12点(20点)	27点(30点)	39点(50点)
期末考査	—————	14点(20点)	25点(35点)	43点(45点)
合計点	—————	26点(40点)	52点(65点)	82点(95点)

(2-2) 観点別評価の換算

* 例えば定期考査の点数を60点満点(授業における観点別評価の点数を40点満点)とし、それぞれの観点の換算点を以下のようにして算出する。

○思考・判断

$$26 \times \frac{60}{(40+65+95)} = 7.8 \text{ 点}$$

○技能・表現

$$52 \times \frac{60}{(40+65+95)} = 15.6 \text{ 点}$$

○関心・意欲・態度

$$82 \times \frac{60}{(40+65+95)} = 24.6 \text{ 点}$$

単元	関心・意欲・態度	思考・判断	技能・表現	知識・理解
換算点	—————	7.8点(12点)	15.6点(19.5点)	24.6点(28.5点)

V 授業における観点別評価と定期考査の観点別評価の点数の合計（総括）

関心・意欲・態度	思考・判断	技能・表現	知識・理解	合計
10.5点	14.8点	21.2点	31.6点	78.1点

(キ) 評定への総括

- ・ 授業における観点別評価と定期考査の観点別評価の点数の合計点をもとに、各校で定めた基準により評定を定める。

評価から評定を行う基準例

評定	5	4	3	2	1
評価	100～85	84～70	69～40	39～25	24～0

上記の例のように観点別合計が78.1点の場合の評定は4となる。

エ 留意事項

- ・ 評価にあたっては、科目や単元の内容、評価の場面や評価規準、生徒の発達段階に応じて、観察（行動・発言など）、作品、レポート、ワークシート、ノート、プリント、テスト（ペーパーテストや実技テスト等）などの多様な評価方法から、その学習場面における学習状況を的確に把握できる方法を選択する必要がある。
- ・ 誰が評価しても評価の揺れが最小限になるような具体的な基準を設けるなど、評価の信頼性や客観性を高めていく必要がある。
- ・ 主に実習を行う科目や単元については、その内容に応じて評価規準の観点に重みを設けて評価を行うことも必要である。
- ・ 授業における観点別評価と定期考査の得点による観点別評価の比率は、科目や単元の内容に応じて、適切に設定することも必要である。
- ・ 授業における観点別評価については、資料となる記録を詳細に残しておく必要がある。
- ・ 生徒の発達を手助けできるように評価を工夫し、適宜生徒にフィードバックをし、指導のための評価になるようにする。

オ その他

参考文献

- | | | |
|-------------------------|----------|----------|
| (ア) 高等学校学習指導要領解説 工業編 | 平成12年3月 | 文部省 |
| (イ) 高等学校進学指導要領の解説 専門教育I | 平成13年8月 | 学事出版 |
| (ウ) 高校改訂指導要録の改訂と記入例 | 平成13年12月 | 明治図書出版 |
| (エ) 新しい情報技術基礎 | | オーム社 |
| (オ) 情報技術基礎 | | 東京電機大学出版 |
| (カ) 情報技術基礎 | | コロナ社 |

※ (エ)～(カ)は15年度からの新しい教科書

(8) 商業

商業

ア 教科目標

商業の各分野に関する基礎的・基本的な知識と技術を習得させ、ビジネスに対する望ましい心構えや理念を身に付けさせるとともに、ビジネスの諸活動を主体的、合理的に行い、経済社会の発展に寄与する能力と態度を育てる。

イ 教科の評価の観点及び趣旨

関心・意欲・態度	思考・判断	技能・表現	知識・理解
ビジネスの諸活動に関する諸問題について関心を持ち、その改善・向上を目指して意欲的に取り組むとともに、ビジネスに対する望ましい心構えや実践的な態度を身に付けている。	ビジネスの諸活動に関する諸問題の解決を目指して自ら思考を深め、基礎的・基本的な知識と技術を活用して適切に判断し、創意工夫する能力を身に付けている。	商業の各分野に関する基礎的・基本的な技術を身に付け、ビジネスの諸活動を合理的に計画し、適切に処理するとともに、その成果を的確に表現する。	商業の各分野に関する基礎的・基本的な知識を身に付け、ビジネスの意義や役割を理解している。

ウ 評価方法の例

教科の基礎的科目である、「簿記」の評価規準を示す。

(ア) 「簿記」の目標

企業における取引の記録・計算・整理に関する知識と技術を習得させ、簿記の基本的な仕組みについて理解させるとともに、ビジネスの諸活動を計数的に把握する能力と態度を育てる。

(イ) 「簿記」の評価の観点及び趣旨

関心・意欲・態度	思考・判断	技能・表現	知識・理解
企業における取引の記録・計算・整理について関心を持ち、その知識と技術の習得を目指して意欲的に取り組むとともに、ビジネスの諸活動を計数的に把握する実践的な態度を身に付けている。	企業における取引の記録・計算・整理に関する諸問題の解決を目指して自ら思考を深め、基礎的・基本的な知識と技術を活用して適切に判断し、創意工夫する能力を身に付けている。	企業における取引の記録・計算・整理に関する基礎的・基本的な技術を身に付け、ビジネスの諸活動を計数的に把握し、適切に処理するとともに、その成果を的確に表現する。	企業における取引の記録・計算・整理に関する基礎的・基本的な技術を身に付け、簿記の基本的な仕組みについて理解している。

(ウ) 「簿記」の内容のまとめりごとのねらいと内容及び評価規準

a 簿記の基礎

(a) 「簿記の基礎」のねらい

簿記の意味、目的、歴史や資産・負債・資本と貸借対照表、収益・費用と損益計算書、簿記一巡の手続について取り扱い、簿記に関する基礎的な知識と技術を習得させる。

(b) 「簿記の基礎」の内容

- ・ 簿記の意味、目的、歴史
- ・ 資産・負債・資本と貸借対照表
- ・ 収益・費用と損益計算書
- ・ 簿記一巡の手続

(c) 「簿記の基礎」の評価の観点及び趣旨

関心・意欲・態度	思考・判断	技能・表現	知識・理解
企業における取引を、帳簿に記録・計算・整理する技術である簿記に関心を持ち、簿記一巡の手続の学習に自分からすすんで取り組むとともに、学んだことをまとめたり確認しようとする。	企業における取引を、簿記特有のルールから思考し、基礎的・基本的な知識と技術を活用して適切に判断しようとする。	簿記に関する基礎的・基本的な技術を身に付け、企業における取引を、記録・計算・整理できる。	簿記に関する基礎的・基本的な知識を身に付け、簿記一巡の手続を理解している。

b 取引の記帳

(a) 「取引の記帳」のねらい

現金・預金、商品売買、債権・債務、固定資産、個人企業の資本と税金、営業費、本支店会計について取り扱い、取引の記帳に関する基礎的な知識と技術を習得させる。

(b) 「取引の記帳」の内容

- ・ 現金・預金
- ・ 商品売買
- ・ 債権・債務
- ・ 固定資産
- ・ 個人企業の資本と税金
- ・ 営業費
- ・ 本支店会計

(c) 「取引の記帳」の評価の観点及び趣旨

関心・意欲・態度	思考・判断	技能・表現	知識・理解
企業における日	企業における日	取引の記帳に関	取引の記帳に関

常の取引や支店会計が独立している場合の取引など種々の取引に関心をもち、取引の記帳に自分からすすんで取り組もうとする。	常の取引や支店会計が独立している場合の取引を簿記特有のルールから思考し、基礎的・基本的な知識と技術を活用して適切に判断し仕訳しようとする。	する基礎的・基本的な技術を身に付け、企業における日常の取引や支店会計が独立している場合の取引を計数的に把握するとともに、合理的、能率的に記録・計算・整理する。	する基礎的・基本的な技術を身に付け、企業における日常の取引や支店会計が独立している場合の取引の記帳方法と各種会計帳簿の役割を理解している。
--	---	---	---

c 決算

(a) 「決算」のねらい

決算整理、財務諸表について取り扱い、決算に関する基礎的な知識と技術を習得させる。

(b) 「決算」の内容

- ・ 決算整理
- ・ 財務諸表

(c) 「決算」の評価の観点及び趣旨

関心・意欲・態度	思考・判断	技能・表現	知識・理解
決算整理を伴う決算手続に関心をもち、決算報告としての損益計算書と貸借対照表の作成に自分からすすんで取り組み、作成された会計帳簿からビジネスの諸活動を把握しようとする。	取引の仕訳から勘定の記入を経て作成された会計帳簿の決算日の実際有高や、その期間の発生額を一定のルールに従って思考し、正しい実際有高や収益・費用の額を判断しようとする。	決算整理に関する基礎的・基本的な技術を身に付け、企業における基本的な決算整理を含む決算手続を行い、損益計算書と貸借対照表を作成する。	決算整理に関する基礎的・基本的な技術を身に付け、作成した損益計算書と貸借対照表の意義や役割を理解している。

d 帳簿と帳簿組織

(a) 「帳簿と帳簿組織」のねらい

帳簿、伝票、仕訳帳の分割について取り扱い、帳簿と帳簿組織に関する基礎的な知識と技術を習得させる。

(b) 「帳簿と帳簿組織」の内容

- ・ 帳簿
- ・ 伝票
- ・ 仕訳帳の分割

(c) 「決算」の評価の観点及び趣旨

関心・意欲・態度	思考・判断	技能・表現	知識・理解
----------	-------	-------	-------

<p>帳簿の種類や帳簿全体の仕組みに関心を持ち、伝票や特殊仕訳帳の作成に自分からすすんで取り組むとともに、帳簿記入と帳簿組織からビジネスの諸活動を把握しようとする。</p>	<p>帳簿にはどのような種類や役割があるのか、業務の分担を行ったとき、どのような帳簿組織を用いればよいかなどについて、帳簿の種類や帳簿全体の仕組みを考察し、合理的な帳簿組織を判断しようとする。</p>	<p>帳簿と帳簿組織に関する基礎的・基本的な技術を身に付け、伝票や特殊仕訳帳を合理的、能率的に作成する。</p>	<p>帳簿と帳簿組織に関する基礎的・基本的な知識を身に付け、伝票や特殊仕訳帳を用いた合理的、能率的な記帳方法や帳簿や伝票の種類と役割を理解している。</p>
--	--	--	--

エ 観点別評価の例

(ア) 単元名

「取引の記帳」

「現金・預金」 配当時間 4 時間（5 単位で実施の場合）

(イ) 単元の目標

簿記上の現金の入金・出金及び当座預金の預入れ・引出しなど、現金と当座預金に関する基本的な取引の記帳について理解させる。また、現金過不足、当座借越、小口現金、その他の預貯金の記帳に触れる。

(ウ) 単元の評価規準

関心・意欲・態度	思考・判断	技能・表現	知識・理解
<p>簿記上の現金の入金・出金及び当座預金の預入れ・引出しなどの取引に関心を持ち、取引の記帳に自分からすすんで取り組もうとする。</p>	<p>現金と預金に関する基本的な取引を、簿記特有のルールから考察し、適切に判断し、記帳しようとする。</p>	<p>現金と預金の記帳に関する基礎的・基本的な技術を身に付け、各種帳簿に記録・計算・整理できる。</p>	<p>簿記上の現金や預金の記帳に関する基礎的・基本的な知識を身に付けるとともに、現金出納帳や当座預金出納帳などの補助簿の役割を理解している。</p>

(エ) 評価方法（評価ツール）

a 観察法

授業等での生徒の様子を観察することによる評価。

（主に関心・意欲・態度、思考・判断の評価に活用）

b 作品法

製作物、学習日誌・レポート・ノートの作成整理状況、補助教材の活用状況からの評価。

（主に思考・判断、技能・表現の評価に活用）

- c テスト法
 ペーパーテスト，実技テストによる評価。
 (ペーパーテストは，知識・理解，実技テストは，技能・表現の評価に活用)

- d 質問紙法
 選択式，記述式等による自己評価，相互評価。
 (観点別評価の補足)
 以上のような評価方法を科目の特性(目標，授業形態等)，評価の主眼，評価の時期等によって活用する。

(オ) 年間指導計画と年間評価計画の例

簿記は，ほぼ100%の生徒が，高校に入学して初めて出会う科目である。したがって，得手不得手などの先入観のない科目であるが，これまで学習してきた教科科目とは，異質感をもちやすい科目でもあり，導入時の「関心・意欲・態度」は，特に重要となるなど，科目の特性，学習進度及び各授業時の内容・目標等により各観点の重みは必然的に変わる。また，他の科目においても同様で，各科目の年間指導計画と各観点別評価の計画(評価の方法・時期・整理・修正)は，指導と評価の一体化の両輪となる。

年間指導計画・年間評価計画

時数	学習内容 (指導単元)	評価観点				評価方法	
		関	思	技	知	事中評価	事後(修正)評価
2	(1) 簿記の基礎 簿記の意味，目的， 歴史	○				観察法	作品法 テスト法，作品法
		○				観察法	
2	資産・負債・資本 と貸借対照表	○	○			観察法 観察法orテスト法	
2	収益・費用と損益 計算書	○	○			観察法 観察法or作品法	
16	簿記一巡の手続 取引と勘定	○	○			観察法	
			○			観察法or作品法	
				○	○	観察法orテスト法	
定期考査						テスト法，作品法，質問紙法	
	仕訳と転記	○	○			観察法 観察法orテスト法	
	仕訳帳と総勘定 元帳	○	○			観察法 観察法or作品法	
	試算表	○	○			観察法 観察法or作品法	
	精算表	○	○			観察法 観察法or作品法	
	決算	○	○			観察法	

		○	○	○	○	観察法or作品法	
				○	○	観察法, テスト法	
				○	○	観察法	
				○	○	観察法	テスト法, 作品法
(2) 取引の記帳							
4	現金・預金	○	○			観察法	
				○	○	観察法or作品法	
		○	○			観察法	
				○	○	観察法or作品法	テスト法, 作品法
7	商品売買	○	○			観察法	

※ 時数－単元ごとの授業時数を示している。

※ 評価観点－学習進度等に応じて授業ごとの主になる評価観点を絞る。

※ 事後（修正）評価－事中評価（観察法）による時点的評価に、単元等の学習の節目において期間的な見地から評価を修正・補完する。また、指導と評価の一体化という観点からもテスト法、作品法等を有効に活用する。

(カ) 評価の記録

上記、「年間指導計画・年間評価計画」をもとにした授業時間ごとの評価を記録し、単元ごとに総括する。

「簿記」授業ごと評価記録表

(01) 番 氏 名 ○○○○				
単 元 名	簿記の意味, 目的, 歴史			
評価の観点	関	思	技	知
1時間	A			
2時間	B			
3時間	※B			
4時間				
5時間				

現金・預金			
関	思	技	知
B	A		
		A	B
A	B		
		A	A
A	B	A	A

※ [A, B], [C, B] などとなる場合は後の評価を重視する。

「簿記」単元別評価記録表

1年1組		簿記の意味, 目的, 歴史				現金・預金				
番号	氏 名	関	思	技	知	関	思	技	知	知
01	○○○○	B※	B	B	A	A	B	A	A B	
02	△△△△	C	B	B	A	B	A	A	B	
03	◇◇◇◇	A	B	B	B	B	B A	A	B	

※ 観点別項目の右欄は、事後（修正）評価欄であり、事中評価が困難な場合や、提出物（作品法）、確認テストなどで修正すべき項目がある場合に記入する。

(キ) 評価の総括から評定

a 観点別評価の数値化

観点別評価記録表の「A」、「B」、「C」を各学校の教育目標、生徒の実態等から基準を決め数値化する。

b 定期考査との統合化

各観点別に数値化された値及び定期考査の得点は、各教科・科目の特性を考慮し換算比率等を決め、統合した数値にする。

c 数値の評定化

統合された数値は、各学校の教育目標、生徒の実態等から基準を決め評定化する。

(ク) 評価の総括例

a 観点別評価の数値化（「簿記」単元別評価記録表から学期末ごとに総括）

(a) 4つの観点ごとに把握（「A」-3、「B」-2、「C」-1として計算）

4観点ごとに計算

$$\left(\text{生徒個人の得点合計} \right) / \left(\text{評価個数} \times 3 \right) \geq 0.8 \rightarrow A$$

$$\left(\text{生徒個人の得点合計} \right) / \left(\text{評価個数} \times 3 \right) < 0.5 \rightarrow C$$

$$0.5 \leq \left(\text{生徒個人の得点合計} \right) / \left(\text{評価個数} \times 3 \right) < 0.8 \rightarrow B$$

例：「関心・意欲・態度」がA、B、A、C、Aであったら

$$(3 + 2 + 3 + 1 + 3) / (5 \times 3) = 0.8 \rightarrow A$$

(b) 各観点ごとに算定された「A」-3、「B」-2、「C」-1をさらに統合

(各観点合計) / 12

例：「関・意」-A、「思・判」-A、「技・表」-B、「知・理」-Aの場合

$$(3 + 3 + 2 + 3) / 12 = 0.92$$

b 定期考査との統合化（学期末評価）

定期考査は100点法で観点別評価に対応した作問をし、平常の観点別評価を50点満点とすると

$$\{ (\text{中間考査素点} + \text{期末考査素点}) + (\text{観点別評価の数値化} \times 50) \} / 250 \times 100$$

例：中間考査73点、期末考査84点、観点別評価0.92の場合

$$(73 + 84 + 0.92 \times 50) / 250 \times 100 = 81 \text{点}$$

(小数点以下切り捨て)

c 数値の評定化（各学期ごとに統合化した数値を学年末に評定化する）

(1学期評価点 + 2学期評価点 + 3学期評価点) / 3 → 計算結果を評定基準にあてはめ、評定化

例：1学期81点、2学期78点、3学期87点の場合

$$(81 + 78 + 87) / 3 = 82 \text{点}$$

↓

80点以上が評定「5」という基準であれば評定は「5」となる

オ 留意事項

- (ア) 科目の特性を踏まえた観点別評価が必要である。
 - a 理論系科目，技術・技能系科目や感性・表現系科目など科目ごとの主題が多岐にわたる教科なので，観点別の評価もそれぞれの特性に応じたものでなければならない。
 - b 比較的各單元ごとに完結する科目や，各単元の関連性が深くステップアップ型の科目では，評価と時間の関係が異なるので評価の総括の際，考慮する必要がある。
- (イ) 指導と評価の一体化をはかり，評価活動を絶えず次の指導に反映させることが必要である。
- (ウ) ティームティーチング，少人数指導，習熟度別指導等の手法を導入する場合は，これらを考慮し，評価について，教員間・生徒間・教員生徒間での共通理解をはかる必要がある。

カ 参考文献

- (ア) 高等学校における評価規準，評価方法等の研究開発について（国立教育政策研究所）
- (イ) 高等学校学習指導要領解説 商業編（平成12年3月 文部省）
- (ウ) 商業科教育法－21世紀のビジネス教育－（吉野弘一 著 実教出版株式会社）
- (エ) 学校の評価活動（佐野金吾 編集 教育開発研究所）

2 「総合的な学習の時間」の評価

(1) 「総合的な学習の時間」の評価についての総論

ア 総合的な学習の時間のねらい

総合的な学習の時間には、

(ア) 自ら課題を見付け、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質や能力を育てること。

(イ) 学び方やものの考え方を身に付け、問題の解決や探求活動に主体的、創造的に取り組む態度を育て、自己の在り方生き方を考えることができるようにすること。

のようなねらいがある。

そのため、この時間に行われる学習活動は、教科横断的・総合的な学習や生徒の興味・関心に基づく学習などを、地域や学校、生徒の実態等に応じ、各学校が創意工夫を生かして実施することが求められている。

イ 「総合的な学習の時間」の評価をどのように進めるか

(ア) 評定を行わない

評価というと、すぐに「数値による評価（評定）」が連想されるが、「総合的な学習の時間」と教科の評価の大きな違いの1つは、「総合的な学習の時間」では、教科のように数値による評価を行わないということである。

学習指導要領解説によれば「単位の修得の認否は行うものの、数値的な評定を行うことは適当ではない」、教育課程審議会答申(1998年7月)においても、「…学習の状況や成果などについて児童生徒のよい点、学習に対する意欲や態度、進歩の状況などを踏まえて適切に評価することとし、例えば指導要録の記載においては、評定は行わず、所見などを記述することが適当である」とされている。

(イ) なぜ、記述なのか？

総合的な学習の時間については、教科指導のように、学習指導要領に教えるべき事項や内容が示され、教科書によってその中身が用意されているということはない。

この時間では、生徒自身が課題を発見し、それを解決したり、改善したりすることができる力の育成が求められている。そうした力を身に付けていく過程で、生きる力の大切な要素である知恵が獲得されていくことをめざしているのである。これらの力や知恵などがどれだけ身に付いたかは、ペーパーテストで測ったり、数値によって表すのは困難である。

(ウ) 誰が評価するか

生徒自らが課題を発見し、解決していく学習であるから「自己評価」が重要となるが、教師や他者は、その学習を支援するという意味で評価をする。総合的な学習の時間では知識や概念の獲得と併せて、分析や表現、調査などの学ぶ力（方法知）や生徒自身が学習の過程を認識することができるような評価が必要とされ

るのである。

評価のよりどころは、学校が設定した評価の観点及びその趣旨である。観点及びその趣旨は、学校の教育目標（例：目指す生徒像）等に基づいた学校の総合的な学習の時間の目標から導き出される。

以下に総合的な学習の時間、単元の順にそれぞれの目標を例示することによって、方法や時期を含めた評価の在り方を考察してみることにする。

ウ 総合的な学習の時間の目標及び内容

総合的な学習の時間のねらいは、学習指導要領に示されているが、教科のように内容や目標は示されていないため、学校あるいは単元ごとに目標が設定されるべきである。下の（ウ）には、（ア）の生きる力をもとに、また、（イ）に示す総合的な学習の時間のねらいも押さえた上で設定した目標を例示した。

（ア）生きる力

- a 自分で課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決する能力
- b 自らを律しつつ、他人と協調し、他人を思いやる心や感動する心など豊かな人間性
- c たくましく生きるための健康や体力

（中教審「21世紀を展望した我が国の教育の在り方」平成9年5月）

（イ）総合的な学習の時間のねらい

- a 自ら課題を見付け、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質や能力を育てる
- b 学び方やものの考え方を身に付け、問題の解決や探究活動に主体的、創造的に取り組む態度を育て、自己の在り方生き方を考えることができるようにする

（ウ）総合的な学習の時間の目標の一例

- | |
|---|
| <ul style="list-style-type: none">a 興味・関心に基づき、①<u>主体的に学習に取り組む</u>、自ら②<u>課題を見つける力</u>を育てる。b ③<u>情報の収集や活用</u>を通して、見通しをもって④<u>課題解決に努める力</u>を育てる。c 課題解決したことを⑤<u>自分なりの方法で伝えることができる力</u>を育てる。d 学習を通して、自分の⑥<u>在り方生き方や進路について考えることができる</u>ようにする。（※下線部①～⑥は、後の観点との関係） |
|---|

（エ）内容

内容は様々であるが、これについては十分検討することが必要となる。

カリキュラムについては、次の三つの視点から編成ができる。もちろん複合型もある。

a 横断的・総合的課題型

各教科等の枠を超えた学習活動を行うタイプである。次項（2）実践事例はこれに該当する。

b 課題研究型

生徒一人一人が、個々の興味、関心に基づいて設定した課題につき追究していくタイプである。総合学科の「課題研究」をモデルとしたものである。

c 在り方生き方・進路学習型

総合学科における「産業社会と人間」がモデルとなる学習のタイプである。自己の在り方生き方や進路への自覚を深めるために、職業体験や社会人講師の講義を行う。生徒の進路目標によっては、大学の学部・学科研究を行うこともある。

ここでは、aの横断的・総合的課題型の「国際理解（ALTとの交流、貿易ゲーム等）」を学習活動として選択した例を基に、具体的な評価の方法等について考える。

エ 総合的な学習の時間の評価のための尺度

(ア) 評価の観点及び評価規準

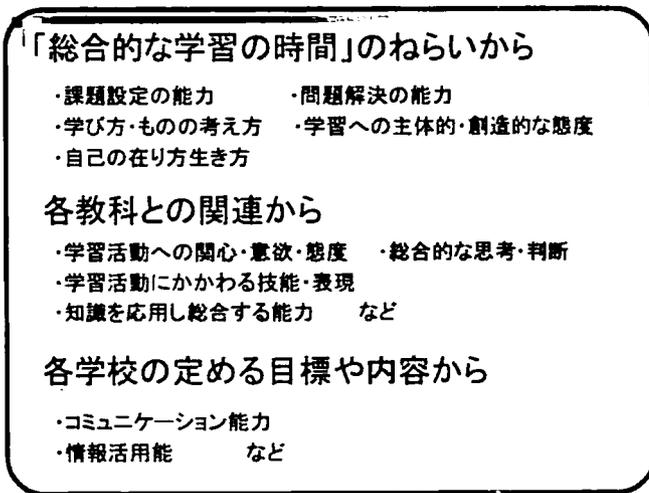
a 観点の趣旨

観点を設定することには以下のような意義がある。

(a) 指導の在り方を多角的に分析できる。

(b) 生徒は、自分の学力の獲得状況を知り、どの面が不足していて、どう伸ばしていけばよいか分かる。

図 観点の設定の仕方



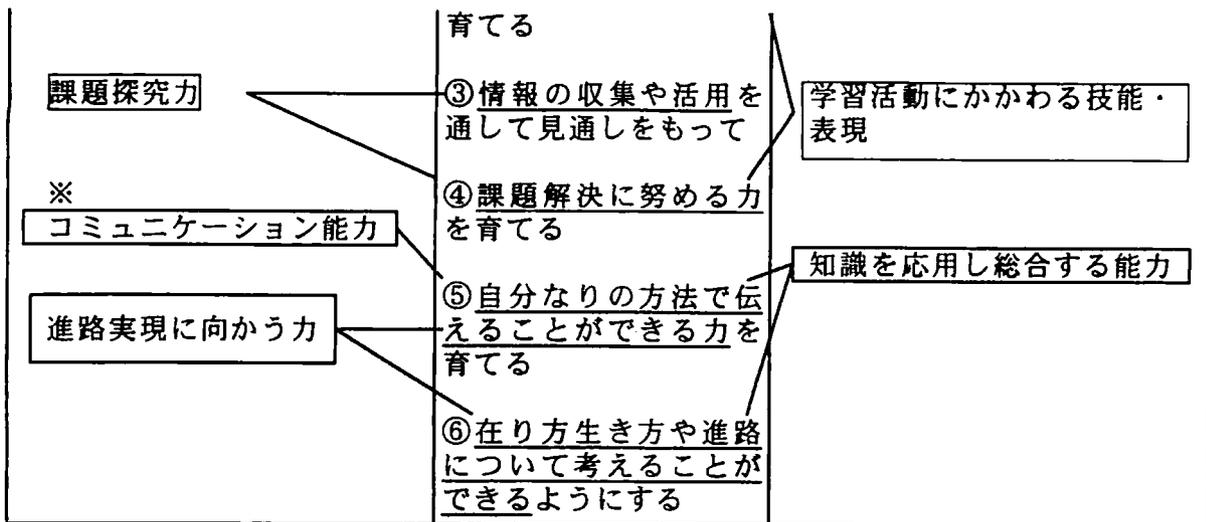
学習指導要領では、評価の観点が設定されていない。したがって、各学校が定めた総合的な学習の時間の目標、内容に基づき、総合的な学習の時間のねらいを踏まえて、観点を設定する（左図）。

この他、教科との関連から設定する場合及び各学校の定める目標や内容（学校の教育目標や内容にあげる全人的な能力、現代的な課題解決に関わる能力）から設定する場合もある。

ここでは、基本的にはねらいから立ててみたが、中でも特に重視したい力として各学校の定める目標や内容から立てた「コミュニケーション能力（※印）」を加えている。

b 総合的な学習の時間の目標と、観点との関連（表）

ねらい及び各学校の定める目標や内容から立てた観点	総合的な学習の時間の目標	教科との関連から立てた観点
活動への意欲	①主体的に学習に取り組み、 ②課題を見つける力を	学習活動への関心・意欲・態度
課題設定力		総合的な思考・判断



c 観点及び評価規準

以下に示す観点に基づいて定めた、評価規準にしたがって評価し、その到達度の度合いを判断する。

観 点	活動への意欲	課題設定力	課題探究力（※コ ミュニケーション 能力）	進路実現に向かう 力
評 価 規 準	<ul style="list-style-type: none"> ●既に学習したことや体験に基づいて、課題を設定しようとする。 ●調査したことを基に、未知の課題の解決に取り組もうとする。 ●研究の成果を工夫して発表しようとする。 	<ul style="list-style-type: none"> ●十分な事前学習を通して、自分に適した課題を設定できる。 ●解決の見通しのある適切な課題を設定することができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ●試行錯誤を通して、粘り強く課題探究に取り組むことができる。 ●多様な手段で情報を集め選択し、課題解決を図ることができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ●学習したことを真に自分との関わりで捉えることで、進路についての考えを深めようとする。

(イ) 単元の評価規準及び評価例

この場合、単元とは問題解決的な学習の一過程を示す。

ここでは、国際理解の中で、生徒の希望によりシミュレーション的な「貿易ゲーム(☆)」を学習活動として取り入れた時間を想定し、その単元の目標(計画)及び評価(振り返り)について考える。

単元の流れは以下の通りである。

学習活動の選択及び貿易ゲームの説明 (1時間)

貿易ゲーム (1時間・本時)

振り返り及び補足 (1時間)

(☆) 貿易ゲームとは

紙(資源)や道具(技術)を不平等に与えられた複数のグループ(国家)の間で、できるだけ多くの富を築くことを競う貿易のシミュレーション・ゲームであり、同じルールの下でも、あらかじめ不平等な初期条件を設定しておくことで、豊かなグループはより豊か

できた		できなかった
自己	教師	相互
他者(公開時)		
〔○〕 ⑤ (試行錯誤しながらも、よりよい貿易ができましたか。)		
A	B	C
できた		できなかった
自己	教師	相互
他者(公開時)		

オ 評価方法及び時期

(ア) 評価方法

学習指導要領解説には「評価の方法としては、例えば、レポート、論文、作品などの製作物、発表や討論の様子などから評価したり、生徒の自己評価や相互評価を活用したり、活動の状況を教師が観察して評価したりするなどして、学習に対する意欲や態度、思考力、判断力、表現力、活動の過程で進歩した点などを適切かつ総合的に評価することが考えられる。」とされている。

これまでは、学期の終わりに、テストを基にした結果の評価をまとめとして実施し、終わっていたが、目標を達成したかどうかをみるには、テスト法だけではおのずと限界がある。前掲のレポートや製作物、あるいは観察等により適切かつ総合的な評価をする工夫の一つに、「ポートフォリオ(☆)」による評価がある。

☆ポートフォリオ

一人一人の子どもの学習の過程及び結果に関する情報・資料が、長期にわたり、目的・計画的に蓄積された集積物

ポートフォリオによる評価の意義は、学習全体を見通す力(メタ認知能力)を付け、自己決定感・自己効力感を高め、学習意欲を高める(☆カー(イ)に後述)とされる。また、個々の子どもの学習の質を直接的に扱うことができる点や、このポートフォリオをもとにして、教師・子ども・親の間に豊かな「コミュニケーションとしての評価(教師と児童生徒でつくってゆく評価)」が生まれる可能性が開ける点などがあげられるだろう。

前掲のようなカードもポートフォリオの一部となる。

(イ) 評価の時期

評価はすべて単元や活動のあとに行う、という固定観念を捨てる必要がある。評価は単元や活動に入る前に評価規準と評価方法を示し、説明してから行うことが生徒の意欲を高めるためにも有効である(☆カー(イ)に後述)。

そして、課題解決の過程においても、学習活動の節目において時期を決めて評価をし、しかるべきときに評価を総括することになる。

カ 評価の記入について

総合的な学習の時間の評価については、2001年4月の高等学校生徒指導要録の改善等について(通知)に、「各学校が定めた総合的な学習の時間の目標、内容に基づいて各学校が設定した評価の観点を踏まえて、生徒の学習状況に顕著な事項があ

る場合などにその特徴を記入するなど、生徒にどのような力が身に付いたかを文章で記述する。」とある。

それまでの評価カード（ABCチェック）により、総括時に「A」、「B」、「C」が定められる。

ここで注意すべきは「C」であるという記述はしないということである。

つまり、教師も生徒も「努力を要する」という事実を受けとめた上で、課題を、あるいは目標までを、さかのぼって見直すべきことをよく認識し、軌道修正をはかる手だてやきっかけとしたい。

それとともに、教師は、以前の生徒の状況と比較した進歩の度合いや生徒の特性としての学習の状況（情報収集は優れている等）をしっかりとらえて評価（個人内評価）し、意欲を高めることを心がけたい。

今回設定した総合的な学習の時間の目標・観点・評価規準、単元の評価規準により、以下に評価の総括例を示す。A～Cのうち、「B」の記述的・分析的な評価としての例である。

外国人講師の話の聞いたり、ALTとの会話や貿易ゲームなどの活動を通して外国人の持つ日本や日本人に対する受け取り方を理解したり、積極的に相手と交流することができた。国際社会における日本の役割について論理的に理解し伝えることができた。自らの視点でこれからの日本人の在り方生き方について考えをまとめ、発表することができた。

補足として、次ページ以降に他県の例のうち、評価規準の作成法と評価規準についての共通理解のはかり方についてのシミュレーションを付け加えておく。

キ 評価規準の作成法と共通理解のはかり方

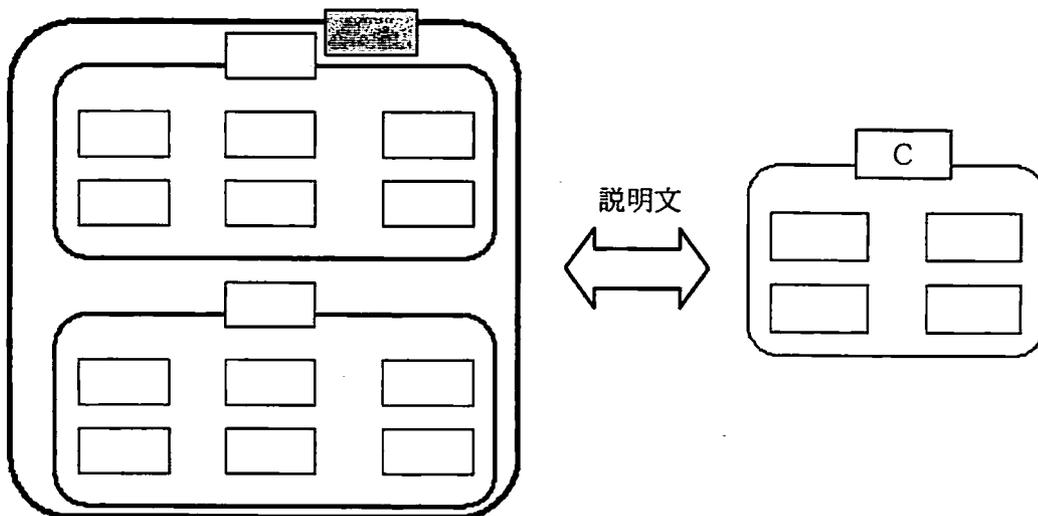
(ア) 作成法 (シミュレーション)

以下のような方法 (例; KJ法※) によって, 問題を把握したり, 意味付けをすることを通し, 問題解決の糸口をつかむことができる。この場合での問題解決とは, 勿論評価規準の設定である。

※KJ法

ブレインストーミングによる発想法, すなわちアイデアを創り出す方法の一つである。はっきりとしないもやもやとした考えやアイデアをよりはっきりとした形で整理・把握するのに役立つ。また, みんなで考えを出し合って, 集団のアイデアをまとめることもできる。

- 思いつくアイデアをすべて短文でカードに記入する。
- 似通った内容のカードを集めてグループ分けをする。
- それぞれのグループに名前を付け, カードに書き, 小グループ名とする。
- 小グループ名のカードを見ながら, 似通ったもので中グループに分ける。
- 小・中グループ間の関係付けをし, それらを図解する。



根気強さ, 発表(表現)力, 関わる, 交渉力, やる気, 伝える力等のカードが出された, と仮定する。

ジャンル分けすると, 以下ようになる。

発表(表現)力①, 伝える力②	→Aジャンル	} Dジャンル
関わる③, 交渉力④	→Bジャンル	
根気強さ⑤, やる気⑥	→Cジャンル	

ジャンルをそれぞれ観点と照らし合わせてみると,

A 問題解決の能力	} D 課題探究力
B コミュニケーション力	
C 問題解決の能力	

なぜ評価規準は皆で話し合うべきなのかは, 次のように述べられている。

…絶対評価に対して信頼性の問題が出てきます。教師によって (中略) 判断が違

うのでは ないか。また、学年間では、教科間では、さらに学校間ではどうなのかと疑問がわいてきます。その信頼性を高めるにはどうしたいのでしょうか。先生方も予想がついていると思いますが、それはやはり話し合うしかない。…

(イ) 共通理解のはかり方

また、評価規準についての理解を深めるロールプレイングゲームもあり、以下のような、評価をシミュレーション（児童生徒役と先生役に分かれ、「幸せなら手をたたこうゲーム」を）する研修パッケージが考えられている。

【自由勝手型】とにかく児童生徒にやらせてみて、勝手に評価する。

【規準確認型】先生の間でのみ評価規準を話し合っ、共有する。

【規準提示型】児童生徒が先生から評価規準を教えてもらって、やってみる。

【相互合意型】評価のための規準を児童生徒と話し合い、生徒がやってみる

【評価再挑戦型】児童生徒がやってみて、評価情報を得た後、もう一度やってみる。

下の型に行くほど児童生徒の不安は消え、学習意欲が引き出される。

ここで自己決定感がもたらすあるいは、事前の評価規準の説明のもたらす学習意欲が証明されているのである。

ク 参考文献

安野 功「私が見聞した”総合の評価規準”よい例・まずい例」

「総合的な学習を創る」2002年4月号

角屋重樹「総合的な学習の授業展開と新しい評価」小学館

加藤 明「総合的な学習における評価規準の位置づけについて」

「総合的な学習を創る」2002年4月号

工藤文三「『総合的な学習』の運営と実践事例」学事出版

「新指導要録と評価の改善」教育セミナー2001講演

H5.10 「学校教育課程一般 指導資料 新しい学力観に立つ教育課程の創造と展開」

文部省東洋館出版社

高浦勝義「総合学習の理論・実践・評価」黎明書房

佐野金吾・小島宏編著「新しい評価の実際－総合的な学習の評価－」ぎょうせい

宮崎 猛「高等学校 進路でつくる『総合的な学習』授業プランと実践」小学館

古川 治「通知票・指導要録への記入をどう工夫するか」教職研修 2002年7月号

広島県立教育センター 2002年3月発行紀要

文部科学省ホームページ

京大ユニセフクラブホームページ

岡山県教育センター「総合的な学習の時間の評価の観点と基準づくりCD-ROM」

(2) 「総合的な学習の時間」の評価の実践事例

K高校では、平成12年度から総合的な学習の時間を

- ・週1時間、通年で実施し、1年で完結する内容とする。
 - ・実施テーマにより、全生徒を学年混合の6班に分け、班別に活動する。
 - ・実施テーマに関連の深い教科の教員を中心に、全教員が分担して各班の指導を担当する。
 - ・教務課の担当者と各班の班長による「班長会議」で重要事項を協議する。
- の形で実施している。

以下に、上記6班のうちの「福祉健康班」の評価を中心に実践事例を紹介する。

ア 学校目標の設定

総合的な学習の時間の実施にあたり、学校・地域の独自性を持たせるために、学校としての目標を次のように定めた。

地域教材・地域人材等を活用し、また、多様な学習形態を取り入れることによって、生活と学習との結合を図り、学習意欲を高めるとともに、課題解決に取り組む姿勢を養い、学ぶことの意義に気付かせる。さらに、この取組みを通して自己の在り方生き方を探り、将来への発展的な学習の糸口とする。

イ 評価の観点及び趣旨の設定

学校目標に即して、総合的な学習の時間全体の評価の観点及びその趣旨を定める。これにより、どのような観点で評価を行うかという共通認識を教員が持ち、班ごとの評価のばらつきを抑えるとともに、教員、生徒ともに目標を持って諸活動にのぞむことができる。

評価の観点	趣 旨
授業に対する意欲 ・態度	・自ら進んで課題を設定し、その解決のために意欲的に取り組もうとする。 ・他者と協力し、また、率先して活動しようとする。
知識・技能の獲得	・課題解決のために多様な手段で的確に情報収集をすることができる。 ・各教科の学習事項を応用・統合して新たな知識として活用することができる。
学習の実践結果	・学習を通して得られた知識や自分の考えを的確にまとめ、論理的に他者に伝えることができる。 ・他者の考えを受け入れることができる。

学習を通しての生徒の内的変化	・学習を通して自己の在り方生き方を探り、自己の成長につなげようとする。
----------------	-------------------------------------

ウ 各班の目標・年間計画・単元目標の設定

各班担当者は年度当初までに、学校目標に即した班の目標を設定し、年間計画表を作成する。さらに、単元ごとの目標も設定しておく。なお、単元目標は学習の進捗状況や生徒の実態に合わせて、随時変更を加えていくものとする。

総合的な学習の時間年間計画表（福祉健康班）

目標：福祉問題が大きな課題となる〇〇市において、生徒自らが福祉社会の現状に気付き、調査や施設での体験を通して自分たちに何が出来るかを考える。その過程で、ボランティア活動は善意や情熱だけでは上手くいくものではなく、知識や技術・組織力が必要であることに気付かせ、郷土における自分の在り方生き方を探っていく。また、地域の人たちと触れあうことにより、自ら学び進んで実践し、心身ともに健康で強い意志と豊かな心を持つ生徒の育成を図る。

期	月	学習内容	実施場所	留意事項	単元目標
1	4	【Ⅰ】オリエンテーション、グループ分け	多目的室	活動内容説明の資料を準備	
	5	【Ⅱ】地域福祉の現状と課題 福祉社会を知る（高齢者・障害者・幼児など） ①身近な福祉(家庭・学校) ②インターネット調査 ③街頭インタビュー ④地域見学(工夫と危険箇所)	多目的室 PC室 〇〇市内 〇〇市内	訪問先との事前折衝は教員が行い、依頼文や礼状の作成は生徒にさせる ブラインドウォークなどで、実際に体験させる	身近な工夫を再発見するとともに、工夫を要する点を実体験で知ることにより、より開かれた福祉社会について考える。また、自分の意見を的確に伝えることや意見を聞く姿勢について学ぶ。
	6	⑤レポート作成 ⑥発表 ⑦討論 「自分たちに何が出来るか」	PC室 多目的室 "	事前に討論会の在り方について学習させる	
		※年間自己評価	多目的室		

エ 班ごとの評価の観点・規準の設定

上記イの総合的な学習の時間の評価の観点に対して、各班のテーマと単元の活動内容に即した評価規準を、各班ごとに担当教員が協議して定める。なお、この評価規準に各教科の評価規準を反映させるなど、評価においても教科との関連性を持たせることを現在検討中である。

評価規準（福祉健康班・単元Ⅱ）

評価の観点	評価規準

授業に対する意欲・態度	<ul style="list-style-type: none"> 福祉の現状に対して問題意識を持ち、自分なりの課題を持って授業にのぞもうとする。 班員と協力して学習活動にあたらうとする。
知識・技能の獲得	<ul style="list-style-type: none"> 書籍、インターネット、インタビューなど、様々な方法で情報収集することができる。 福祉施設の役割を理解することができる。 事物だけでなく、「心のバリアフリー」を理解することができる。
学習の実践結果	<ul style="list-style-type: none"> 学習過程で得られた情報を、課題に即したレポートにまとめることができる。 自己の学習成果を、的確に相手に伝えることができる。
学習を通しての生徒の内的変化	<ul style="list-style-type: none"> 生命への関心と思いやりの心をもとうとする。 福祉社会における自己の在り方生き方を探求しようとする。

オ 評価方法

評価の主体・時期により、評価方法を次のように細分化した。

評価の主体	評価時期			
	時間ごと	単元ごと	学期ごと	学年末総合
教 員	○	○	○	○
生徒（自己評価）	○		○	
生徒（相互評価）	学 習 成 果 発 表 時			

カ 教員による評価

（ア）時間ごとの評価

各班担当教員は、時間ごとに生徒に提出させる「総合的な学習の時間記録簿」（後述）に所見を記入することでその時間の生徒の活動に対する評価を示し、それとともに、教員用の「学習記録簿」で授業の評価を行う。

学 習 記 録 簿		
時間目	月 日	記録者
活 動 内 容		
感 想 と 気 付 き		

(イ) 単元・学期ごとの評価

総合的な学習の時間の主担当者は教員評価表（班別）を作成し、各班担当者は各単元及び学期ごとにA、B、Cの3段階で評価を行う。

評価は観点別に行い、各生徒の特筆すべき活動や変化も記録する。

評価の観点		授業に対する意欲・態度		知識・技能の獲得		学習の実践結果		学習を通しての生徒の内的変化	
番	氏名	評価	特記事項	評価	特記事項	評価	特記事項	評価	特記事項
*** *	〇〇〇〇	A	グループのリーダー的存在として頑張った	A	インターネットでの情報収集が得意である	A	ジェスチャーの発表をわかせた	B	
*** *	△△△△	B		B		C	レポート作成に主体的に関わるできなかった	C	思いやりの気持ちを素直に表現することができなかった

(ウ) 学年末総合評価

学年末総合評価は、教員による評価に、生徒による自己評価や相互評価を参考にして総合的に判断し、評価文の作成と評価の目安の算出とを行う。

a 評価文例作成

評価文作成のために、上記エの評価の観点のうち、「学習の実践結果」を「能力」と「成果」に細分化し、計5項目とする。

各班担当者は協議のうえ、この5項目に対して各班ごとの評価文例を定める。この評価文例が、実際に評価する際のよりどころとなる。

評価文例（福祉健康班）

観点	意欲・態度	知識・技能	能力	成果	内的変化
文例	①問題意識を(7)学習に(イ)。	②活動の意義(ウ)。(I)知識・技能(オ)。	③(カ)。	④成果(キ)。	⑤学習を通して(ク)。
観 点 別 評 価	A 7 強く持って イ 意欲的に取り組み	ウ 的を的確に理解し I 積極的に オ を得ようとした	カ 高い能力を持ち	キ を十分あげた	ク 共生の念を養い、自己変革につなげることができた
	B 7 持って イ 取り組み	ウ を理解し I オ を得ようとした	カ 能力が向上し	キ をあげた	ク 共生について考え、自己を見つめ直すことができた
	C 7 持って イ 取り組むことがあまりできず	ウ 理解が不十分で I なかなか オ が得られなかった	カ 能力の向上が不十分で	キ があまりあがらなかった	ク 自己の再認識になかなか結びつかなかった

(①+②+③+④+⑤が評価文例となる)

b 評価文の作成と評価の目安の算出

「成績入力表」に観点別評価を入力すると、評価文例が自動作成される。

この評価文例をもとに、後述する生徒による自己評価や相互評価等の内容を

加味して、文言訂正や特記事項の加筆を行い総括し、個々の生徒に応じた評価文を作成する。

また、観点別評価の入力と同時に、「評価の目安」がAからEの5段階で自動算出される。算出の基準は、事前に班長会議で統一して定めたものである。

評価の目安を算出するのは、生徒の総合到達度を各教員が理解しやすくするとともに、単位修得の認定・不認定を明確（評価の目安Eが単位修得不認定を表す）にすることを目的としている。

成績入力表（福祉健康班）

番	氏名	① 意欲 態度	② 知識 技能	③ 能力	④ 成果	⑤ 内的 変化	評価 の 目安	評 価 文
****	〇〇〇〇	A	B	B	A	A	B	問題意識を持って学習に意欲あ げるよう努力した。学習を通し とができた。
****	△△△△	C	B	C	C	C	D	問題意識を感じつつ学習に取り とした。

c 成績処理の手順

成績入力から指導要録の記入までの成績処理手順は以下のとおりである。

- ① 各班担当者が「成績入力表」に観点別評価を入力すると、評価文例が自動作成され、評価の目安も自動算出される。
- ② 各班担当者は、自動作成された評価文例に生徒による自己評価や相互評価等の内容を加味して総括し、正式な評価文を作成する。
- ③ 「成績伝票」には評価の目安と正式な評価文が、「成績一覧表」には評価の目安のみが、それぞれ自動転記される。
- ④ 各班担当者は、生徒個別に評価文を知らせる。
- ⑤ 担任は、成績伝票をもとに、評価文を「指導要録」に転記する。この際、評価の目安で単位修得の認定・不認定を確認し、不認定の場合は評価文末尾に“(単位不認定)”と追記するなど記載内容に留意する。

キ 生徒による自己評価

(ア) 時間ごとの評価

生徒は「総合的な学習の時間記録簿」に、時間ごとの活動内容や自己評価、次時の課題設定などを記入する。

総合的な学習の時間記録簿							
月	活 動 内 容	分かった事、気付いた事、疑問に思った事等				次回に向けて	
	自	遅刻をせず意欲を持って積極的に授業に取り組むことができたか	5	4	3	2	1
己	互いの意見を尊重し、協力して授業に取り組むことができたか	5	4	3	2	1	
日	学習を通して新しい知識や技術等を獲得する事ができたか	5	4	3	2	1	
評 価	----- 今回の学習における自分の総合評価をしてみよう	5	4	3	2	1	

活動内容	分かった事, 気付いた事, 疑問に思った事等	次回に向けて

(イ) 学期ごとの評価

各学期末に, 当該学期の総合自己評価を行う時間を設ける。

総合自己評価にあたっては, 上記アの時間ごとの評価を参考にするとともに, 評価の手助けとなる学習過程の記録として, ポートフォリオ方式による資料の積み重ねや, 記録写真の収集などをしていくと便利である。

総合的な学習の時間～自己評価票～			
福祉健康 班 年 氏名			
今学期の総合的な学習の時間への取組みについて, 振り返ってみよう			
項目	内容	自己評価	評価の理由・顕著な活動等
授業への意欲・態度	興味・関心・意欲があったか, 周りと協調し責任ある行動がとれたか	5 4 3 2 1	
知識・技能等の獲得	インターネットを使いこなせたか, バリアフリーや各施設の役割等を理解できたか	5 4 3 2 1	
学習の実践結果	福祉について真剣に考えることができたか, レポート作成・発表に精一杯取り組んだか	5 4 3 2 1	
学習を通しての内的変化	生命に対する関心と思いやりの心が持てたか, 学習を通して自分に変化があったか	5 4 3 2 1	
※この自己評価は, 自分の学習を振り返るためのものです。結果は, 成績に直接反映されるものではありません。			
来学期に向けて, 自分なりの学習課題を考えてみよう			
この班で今後やってみたいと思っている事			
教員からのコメント			

ク 生徒による相互評価

学習成果を発表する機会を設け, 生徒による相互評価をさせる。その際,

- ① 良い点を中心に評価し, 悪い点を挙げるのは最小限にとどめるよう指導する。
- ② 評価をうけて, レポートを訂正させるなど, 「評価」が「改善」に役立つものであることを理解させる。

などに留意する。

発表内容評価票	
評価対象者(グループ)	年 氏名
1 今回の発表に対して, 次の各項目ごとに, 良かった点を <u>2つ以上</u> , 改善が必要な点を <u>1つ以内</u> , 具体的に箇条書きで書こう。	

発表内容(わかりやすさ, まとめ方等)		発表の仕方(態度, 声の大きさ等)	
良い点		良い点	
改善点		改善点	

2 あなたが発表を聞く態度はどうでしたか、5段階で評価しましょう。

5	4	3	2	1
---	---	---	---	---

ケ 留意事項

- (ア) 総合的な学習の時間の実施や評価の在り方については、特別に委員会を設けるなどして十分に協議した上で決定し、全教員に周知・徹底させるよう配慮すべきである。
- (イ) 総合的な学習の時間では、「所見による評価」を行うため、教務規定改定などの条件整備が必要である。
- (ウ) 実施にあたっては、計画・実施・評価・改善の一連の作業を随時取り入れるよう留意する。
- (エ) 評価に際しては、担当者の負担が過重にならないよう工夫することも必要である。
- (オ) 班別活動の場合も、教員による評価のばらつきを押さえるために、評価の観点は一統すべきである。
- (カ) 活動内容に即した評価をするために、評価規準は活動グループごとに設定するなどの工夫が必要である。
- (キ) より客観的でばらつきのない評価を行うために、評価文例を作成する方法をとることができるが、この場合、それをそのまま評価文とせず、生徒による自己評価や相互評価等の内容を加味して総括することにより、個々の生徒に応じた評価文となるよう配慮すべきである。
- (ク) 生徒による自己評価は、自己の学習状況を振り返り、改善していくことを主目的とするが、教員による評価と生徒の自己認識とに大きな隔たりがないようにすることや、授業内容の改善にも役立てるべきである。

コ その他(参考文献)

- (ア) 明治図書「高等学校学習指導要領の展開 総則編」山口満・工藤文三編著
- (イ) 明治図書「高等『総合的な学習』研究と実践の手引き」宮崎猛編
- (ウ) 明治図書「総合的な学習の評価 新指導要録&通知表 記入のヒントQA47」
安野功編
- (エ) 文教書院「高等学校『総合的な学習の時間』創意ある実践」清水希益編著

高等学校

学習評価事例集

高等学校における確かな学力の向上のために

平成15年3月

山口県教育委員会